

第29回「ことば」フォーラム

コミュニケーションとは何か
—伝え合いの意味—

2006年2月18日（土）

国立国語研究所 講堂

小池 保（尚美学園大学）

清 ルミ（常葉学園大学）

箕口雅博（立教大学）

熊谷智子（国立国語研究所）

杉戸清樹（国立国語研究所）

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（伊藤雅光） それでは、時間になりましたので、国立国語研究所第29回「ことば」フォーラムを開催いたしたいと思っております。本日はお忙しい中、にぎにぎしくお集まりくださいましてありがとうございます。私は今日の総合司会を務めさせていただきます。当研究所の研究者伊藤雅光と申します。今回は「コミュニケーションとは何か」というテーマで、前半に3人の御専門の方々から御発表をいただきます。それから、20分間の休憩をはさんで、後半は同じテーマでディスカッションを行います。それでは、お手元の資料の確認をいたしたいと思っております。水色の封筒の中を御覧ください。まず、今回の要旨集がございます。それから、質問票がございます。前半の発表に関しまして、会場の皆様方から御質問を受けたいと思っておりますので、御質問のおありの方はこれにお書きください。そして、休憩の10分間のあいだに係のものにお渡しください。それから、緑色の紙はアンケートでございます。今日のフォーラムが終わりましたから、アンケートの御協力を、よろしくお願いいたします。そして、係のものにお渡しください。それから、「国語研の窓」という広報紙が入っております。最後に、当研究所の概要のパンフレットが入っております。以上でございます。それでは、当研究所の所長、杉戸清樹から御挨拶申し上げます。

杉戸 暖かくなったり、寒さが戻ったり、そろそろ花粉も飛び始めたという話を聞きました。私も花粉症ですので、体の調子を整えるのに気を配る毎日が続いております。そのような中、今日は大勢お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。「ことば」フォーラムという私どもの催し、今日で第29回を迎えております。私どもでは6年ほど前から、年に5回ずつくらいの割合で、この「ことば」フォーラムという催しを続けてきております。今年度も東京で2回、それから、北海道の札幌で1度、それから、名古屋市で1度開きまして、今日が今年度の5回目に当たります。この催し、言葉の研究とか、言葉の教育の研究、そういう領域の専門家だけでなく、ほかの分野でお仕事をなさっている方、あるいは御家庭の方、いわば一般の市民の皆様方においでいただくのを主眼といたしまして開いております。言葉や日本語、場合によっては外国語についての話題をその都度選びまして、研究所の研究成果も含めながら、講演とか、あるいはシンポジウムとか、いろいろなかたちで開いてきているものであります。「フォーラム」というカタカナ言葉を使っております。これは大きな広場、たくさんの方が集まる場所、そういう意味がもともとの言葉だそうでありまして、この「ことば」フォーラムもそういう意

味でいろいろな方々にお集まりいただき、日ごろの言葉の暮らし、あるいは言葉そのものについて話し合っていたり、考える機会を過ごしていただいたりする、そういう趣旨で開いているものであります。29回目に当たります今回は、すでにお手元の資料にありますように、「コミュニケーションとは何か」というテーマを掲げて企画いたしました。その目指すところ、あるいは内容はのちほど詳しく御説明いたしますけれども、言葉というものの最も基本的な働きがコミュニケーション、言葉による伝え合いの場だと思えます。そのことについて、いわば基本的なところに立ち戻って考える、そういうテーマだと思っております。今日のために研究所の外の大学から3人の先生方にお話、あるいは討論をお願いして来ていただいております。小池保先生、清ルミ先生、そして、^{みぐち}箕口雅博先生のお三方です。先生方、どうもありがとうございます。当研究所からは熊谷智子所員、それから、私ものちほどの討論に参加いたします。どうぞよろしく願います。夕方まで3時間程度の短い時間ではありますが、先ほど申しましたような趣旨で、言葉というもの、そして、今日はその言葉の最も基本的なところに一度改めて立ち戻ってお考えいただく。あるいは議論に参加していただく。そういう時間を過ごしていただければ幸いです。御質問をお寄せいただいたり、場合によっては御発言いただいたりする機会も準備しておりますので、そんなときにはどうぞ積極的に御参加いただきまして、それぞれのお立場で、それぞれの何か御土産という申し訳ない言い方になりますが、御土産を持ち帰っていただくことができれば幸いです。半日のあいだ、どうぞよろしく願います。ありがとうございました。

司会 それでは、引き続きまして今回のフォーラムの企画を担当いたしました研究員の野山広と、それから、後半のディスカッションの司会を務めます研究員の熊谷智子から今回のテーマの趣旨を御説明申し上げます。

野山 趣旨説明を簡単にさせていただきます。先ほどの封筒の中に入っている「国語研の窓」というものがございます。「国語研の窓」の4ページを御覧になっていただけますでしょうか。4ページに「ことば」フォーラムの案内といたしまして、第27回「伝え合いの言葉ーコミュニケーションの意味ー」というものがございます。これは今回のフォーラムに先立って、北海道で一つフォーラムが行われました。趣旨は非常に似たようなものを行ったわけですが、北海道のときにはコミュニケーション教育にかかわっている先生方とか、地域の日本語を必要とする学習の支援者の支援のためにどのような方策が考えられるのかということ視野に入れて、コミュニケーションという問題について議論

しました。結果としてこのようなことが指摘されました。今日は支援者とか教授者のところに視点を置くのではなくて、実際に私たちが1対1とか、1対複数とか、複数対複数でコミュニケーションをとるときにどのようなことに注意を置いてコミュニケーションすれば、より効果的なお付き合いができるのかということに焦点を当てます。そして、それについて、日本語教育とか日本語の視点というよりは、より幅広く、小池先生の場合には放送文化論という観点から話していただきますし、清ルミ先生の場合には異文化コミュニケーションという観点から話していただきます。それから、最後に箕口先生からは地域コミュニティにおける心理の問題、こういった観点からお話をさせていただけることになっています。こういった複数の、あるいは他分野の観点から話をさせていただく根幹になっているものは何かというと、これから熊谷研究員のほうから話がありますが、もともと昨年、国立国語研究所で発行しました「ことば」シリーズという本があります。その本がもとになっておりまして、その本のテーマが実は「伝え合い」ということでした。それに関連して、ほぼ1年間通して追究してきた成果を今日、皆さんの前で提供するとともに、一緒にそれを分かち合うことができればと思っております。短い時間ではありますが、よろしくお願いします。では、熊谷さん、よろしくお願いします。

熊谷 国立国語研究所の熊谷智子と申します。よろしくお願いいたします。私は今ちょっと話にも出ました新「ことば」シリーズ、「伝え合いの言葉」というテーマで、こういう小さな本を去年作りました。その編集に携わっていましたが関係で今日ここにおります。この本は会場を出たところにも展示、販売などをしておりますので、また休憩時間にもちょっとお手に取って見ていただければと思います。内容としましては、コミュニケーションや、人とかかわり合いの上で言葉がどういった働きをしているのか、それから、このごろ電子メールとか、携帯とか、インターネットというかたちで、発信や受信の仕方が非常に多様になってきた、そういった社会の動きの中で言葉によるコミュニケーションがどんな影響を受けているかというようなことについて解説したり、考えたりしているものです。本日の資料の中にも、17ページから4ページほど、新「ことば」シリーズの内容から抜き出すかたちで文章を書きました。その中で書いていることですが、私たちが毎日、人に言葉で働きかけるときに、大きく分けると二つのことを、非常に心を配ってやっているのではないかと。一つは、伝えようと思うことをできるだけきちんとはっきり伝えること。何か目的があって働きかけるのだったら、その目的を達成するということです。それから、もう一つは、話をしている相手との関係をできるだ

け円満に保つということです。これは二つ同時にうまくいく場合もあるのですが、なかなか両立するのが難しいというようなときもあります。たとえば、断りを言うとき、はっきり言わずに誤解が起こってしまったら困るけれども、あまりはっきり言うときつく聞こえて、ちょっと関係がぎくしゃくする。そういったときに私たちは言い方を選んだり、にっこり笑ってみたり、様々なことをしています。そうした工夫がコミュニケーションの楽しみであり、醍醐味だいごであったりということがあります。また、社会生活の中ですから、そういったコミュニケーションを通して人と関係をつくったり、共同で仕事をしたりというようなことを同時にしております。その中でも言葉は大きな働きを担っていると思います。本日これから、お三方のお話の中で、そういったことについていろいろな切り口から、ときには具体的な例も交えて伺えるのではないかと考えております。私も後半のディスカッションで一緒に参加しながら、そういった言葉の働きについて考えていきたいと思っております。またのちほど、どうぞよろしくお願いいたします。

司会 それでは、発表に入りたいと思います。最初の御発表は尚美学園大学教授小池保さんの「身も心ものびのびするコミュニケーションのススメ」です。では、よろしくお願いいたします。

「身も心ものびのびするコミュニケーションのススメ」小池 保

(配布資料：p. 1～2)

小池 こんにちは。今御紹介いただきました尚美学園大学で教えております小池と申します。三十数年、NHKでアナウンサーとして仕事をしてまいりました。晩年は解説委員として、「ことば・表現・コミュニケーション」という分野で企画をしたり、取材をしたり、あるいは解説をしたりという仕事をしてまいりました。細かい話をすると定年がどうのこうのという話になりますので、省略いたしますが、去年の4月から尚美学園大学という川越にある大学ですけれど、そちらのほうで放送文化論、日本芸能史、あるいはアナウンス表現論など、雑多な科目を持っているということでございます。今日、レジュメをお手元にお持ちいただいていると思いますので、適宜それを参照しながらお話をお聞きください。最初に、ほとんど拷問かと思われるような小さな字で、今日の全体を見渡す趣旨が書いてありますので、そこだけちょっと読んでおきます。およそ10年ぶりに全面改訂される次期学習指導要領では、「言葉の力」を全教育課程の、これは国語だけではなくて、あらゆる教育活動の基本に据えて、論理力や表現力を高めてゆくことにな

ると言います。言葉と論理性の問題は、古くて新しいテーマとして、またまた注目を集めるのだろう。おそらくそういうことになってくるだろうと思いますが、本日の私のお話は、ギスギスする論理性ではなく、日本人になじむ、「のびのびできる合理性」について述べます。言外には、論理性というものに対する私のとらえ方がにじみ出ています。

「ギスギスしている」というところににじみ出ているわけでありまして、「日本人になじむ、のびのびできる合理性」というところに、合理性という言葉が本来もっている、人間に対して、日本人に対して温かみのある、そういう性質を感じているということが、この4行のプロローグの部分でお感じいただけるのではないかと思います。冒頭申し上げたとおり、アナウンサーをずっとしてきまして、初任地が広島県の福山、次が札幌、それから、新潟、東京、大阪というふうに各地を転々としてまいりました。大阪で4年間勤務したときに、私の場合はアナウンサーをしながら、番組の企画、制作ということに興味、関心がありましたので、自ら企画をして、ラジオで9時間放送するという「大阪弁でしゃべるデー」という番組を放送いたしました。これが1992年4月8日のことですが、朝10時から夜の7時まで、9時間にわたる生放送を全部大阪弁でやる。ただし、全国ニュースだけは、どうしてもこれはニュースの壁が厚くて、共通語でやることになりましたけれど、それ以外のものはローカルニュースも含めて極力大阪弁でやるという番組を放送いたしました。そのオープニングをカセットテープにとってありますので、雑な音ですが、ちょっと聞いていただきます。

<録音の音声>

なんだ、アナウンサーは共通語でしゃべっているじゃないか、と。あれで大阪弁なんです。私はこの番組を企画・制作して驚いたんですが、「もっと大阪弁でしゃべってくださいよ」とお願いして、「いや、これ、大阪弁なんですよ」と。思いのほか、コテコテの大阪弁というものが本来の大阪弁ではないということも合わせて勉強いたしました。洗練された大阪の言葉というのは、かなり共通語に近いものがあります。したがって、東京で話されても皆さん十分にお分かりになるわけです。吉本興業の大阪弁が大阪弁というふうに多くの方が思っていますけれども、決してそういうものではないということが、この番組の中でもだいぶ、実際の音声を通してアピールできたのではないかなと思います。この番組を9時間放送しましたら、とくに宣伝をしたわけではありませんが、正直いって、うまくいくかなと思いながら、心配しながら放送したんですが、なんと驚いたことに翌朝の各新聞のコラム、社説に一斉に取り上げられたんです。示し合わ

せているんじゃないかと思うぐらい。自慢話として聞いていただければと思いますが、「天声人語」がここに 있습니다。それから、これは日経新聞の「春秋」。これは朝日新聞のまた別の記事です。それから、これがサンケイ新聞の「産経抄」。国語審議会でも、NHKのラジオ番組で最近試みられた9時間にわたる大阪弁の放送が運営委員会などの場で話題になったというようなことも、これぐらいの記事で紹介されたり、次の週には週刊朝日で「大阪弁は地球を救いまんねん」というタイトルで出る。宣伝していないんです。ところが、ものすごく社会が反応したんです。なんでこんなに社会が反応したのかというのが、放送した後の大きな疑問だったんですけれども、どうも世の中、こういうことを潜在的には待望していたんじゃないか。それは大阪の言葉をラジオを通して聞きたいということを待望していたんじゃないかと、何か押さえつけられたものがあって、その鉤脈にこのラジオ番組が触れたので、ビリビリとこういう反応が出たんじゃないかなというのが、放送を終えたときの分析でした。この放送をきっかけにして、翌年も、またその翌年も3年間連続して4月8日前後に、新年度に入った最初の土曜日の朝10時から9時間、生放送をするというスタイルで放送が行われました。アナウンサーとして非常に貴重な体験を、その仕事を通して得ることができました。この番組の一番のポイントは、それまでの放送における方言の扱いというのは、共通語との違いを単語レベルでとらえて、共通語と違うから、おかしいね、おもしろいねと言って笑ったり、あるいは共通語と違う、それぞれのお国のよさがあるねと言って感心したり、単語レベルで方言というものを見る。そして、きる。こういう接近の仕方がほとんどだったんです。それはちょっとおかしいのではないかというのが、この番組のもともとの企画の根幹にありまして、単語レベルで地域の言葉を見ないで、言葉には必ず発想、その言葉を使う人たちに独特な意識や発想、横文字で恐縮ですが、マインドというものがある。ドンマイのマインドです。発想・意識・マインド、そこを見よ。こういう番組としてやったわけです。したがって、この番組の中では、大阪の言葉を使う人たちに独特な意識や発想やマインドというものが様々なかたちで紹介されました。そういうものを大いに活用していきましょう。そういうスツメにこの番組になったということが一つの側面としてあります。もう一つは、たまたま大阪という地域を言葉として照らしたわけですがけれども、その考え方というのは、べつに大阪でなくても、仙台であっても、札幌であっても、福岡であっても、沖縄であっても、それぞれの地域の言葉があり、その言葉を使う人たちに独特な意識や発想やマインドがあるんだから、そこにもっと光を当てて、それを活性化し

ていったらどうなるか。たぶん地域がものすごく立ち上がってきて、それぞれが発信を始めるおもしろい日本になるんじゃないか。こういう提言も番組を通していたしました。まとめますと、レジュメにあるとおり、大阪の言葉の背後にある、「発想・意識・マインド」というものに光を当てた。もう一つは地域。それぞれの地域文化というものがこれからもっと元気になっていくべきである。また、そうなっていくであろう。こういうことをある種の予言性をもたせてアピールをした番組ということになります。13年たちました。地域の文化ということに関しては、御承知のとおり、先般も道州制の具体化ということがまた議論になってくるなど、地方分権ということがその後、不十分なところは非常に多いですけど、私たちの意識の中でかなり明確に位置づけられるようになってきました。地方分権。地域々々でこれからやっていく。大きな政府から小さな政府へという言葉とシンクロするかたちで、並行するかたちで地方分権ということが、13年前のこの番組の中でアピールしたことが、今、現実のものに少しずつなりつつあります。しかし、いちばん訴えたかった、どの地域にもある独特な発想・意識・マインド、それに光を当てよ。つまり、認識をしよう。認識をしたら、それを活用して、新しい文化をそれぞれの地域から発信していこう。これが地方分権にもつながっていくわけですが、その独特な意識・マインド・発想というものに対して、認識をもって、深めて、活用していくというところに関しては、まだまだこれからの課題ではないかなと思っております。では、それに光を当てて、認識をして、活用していくとどうなるかということ、その番組の中で扱った大阪の言葉を例に御紹介をしようというわけです。私が驚いたのは、例でレジュメの中に挙げてありますが、様々ありますが、典型的な例として、ここに「言え」という命令形を挙げてあります。大阪の言葉で「言いなさい・言え」という言葉の変化形は実に様々あります。東京すなわち共通語と考えるとよろしいかと思いますが、「言え・言えよ」「言って・言ってよ」「言いなさいよ」などなど、変化形は数え上げていくと10種類前後は出てきますが、そこから先は出てこないですね。ところが、大阪の言葉は次から次へと出てきます。基本的なかたちの段階から、すでに東京よりも多彩です。「言え・言えよ」。私は大阪の生まれ育ちではありませんので、アクセントやイントネーションは御勘弁ください。「言え・言えや」「言い・言いな・言いや」「言うて・言うてえな・言うてや」。これが基本形とされているものです。それから、これに「んか型」というのがありまして、「言わんか・言わんかい・言わんかいな・言わんかいや」「言いんか・言いんかい」。インカイというと委員会みたいですが、「言いんか・言いんかい・

言いかいな・言いかいや」「言うてんか・言うてんかいかいな・言うてんかいかいや」。そのほかに「なはる型」というものもある。あるいは「しまへんか型」。「なはる型」というのは、たとえば、「言いなはれ・言いはなれや・言いなはらんか・言いなはらんかいかいな」。みんなちょっとずつ違うんです。それから、「しまへんか型」は、「言うとくなはらしまへんか」、あるいは「言うとくなはらしまへんかいかいな・言うとくなはらしまへんやろか」。全部で30以上、数え上げるとあるんです。これはどういうことを意味しているかというところ、「言ってください」ということを言うための選択肢がたくさんあるということです。私が大阪の言葉を使いこなせる人間で、誰かと対したときに「言いなさいよ」ということを言う。この場面の中でどれを使うといちばんいいかということパーッと大阪の人は計算するわけです。そして、「言うてんかいかいや」という言葉に決めたら、それを出す。「言うてんかいかいや」はその場面の中では実にピッタリと決まる。こういうふうな豊かな選択肢をもっている。これはとらえ方によっては曖昧あいまいということ。曖昧な中で相手と向き合いながら、相手の気持ち、今流の言葉でいうとニーズ、ニーズがこれだと思うと、「言ってくれはらしまへんやろか」というのを出す。相手のニーズにピタッと合うものを、たくさんあるものの中から出す。こういう発想・意識・マインドをベースにした言葉の準備があるわけです。大阪の人に対してよく、大阪の人間は曖昧だという一方で、大阪の人たちは合理的だ。矛盾した評価があるのは、実はここに原因があるんじゃないかなと思いました。たくさん選択肢がある。そのどれにしようかなというときは曖昧なんです。けれども、相手のニーズを見つけた途端に合理的になる。だから、曖昧と合理が共存しているわけです。こういう非常に複雑な文化を持っている大阪の言葉です。これを言葉を変えて言うと、相手のニーズに対して極めて敏感だということです。いつもニーズを見ながら、それに合う言葉を中から繰り出してくる。ニーズの海の中に泳ぐ。その手立てとして大阪の言葉が様々用意されている。大事にしているのはニーズなんです。そのニーズはくだらないニーズもあるんです。けれども、大阪の人たちはくだらないニーズを相手も持っていて否定しません。どんなにばかばかしいニーズであっても否定しないで、それにきめ細かく応える。こういう文化を持っています。今度はビデオです。さっきみたいなちゃちなことではなくて、一応ビデオを御覧いただきますが、映像はちゃちです。なぜかというところ、私が撮ったので、アルコール中毒ではありませんが、ちょっと震えております。ちょっと出していただけますでしょうか。最初は大阪の大正区というところにあるバスの停留所から御覧いただきます。

<ビデオ上映>

これは大阪市交通局が運営しているバスで、市バスです。大正区のバス停です。大変モダンなつくりになっているバス停で、当然、雨、風がしのげるようになっておりますが、ここでびっくり仰天有頂天。昔そんな歌がありました。なんと、御覧ください。緑の丸がついていますね。あそこにバスがいるんです。なんと1, 2, 3, 4, 5, 6, 7。駅の数で言うと八つ、八つ前の駅から表示しているんです。今バスがどこにいるかということが分かるようにしてある。こういうことは東京ではやりません。大阪だけの文化です。八つ前の駅から表示をしている。

<ビデオ上映>

さて、次は何でしょうか。今度はやはり大阪市の地下鉄です。市営地下鉄、券売機。これは最近、東京などでも多くなってきましたが、硬貨はまとめて。一つひとつ硬貨を入れるのではなくて、こうやって投入口が大きいんです。したがって、まとめてガバッと入れることができます。どうしてこういうものを開発したかという、そういうニーズがあったから。お年寄りなどが1個1個入れていくと、後ろに行列している人からしかられる。まとめて入れるようにしてくれよ。へい、分かりましたというので、もちろん大阪弁で言うわけですが、そういうのを開発。

<ビデオ上映>

これは駅のホームですが、今電車がどこへ来ているかという表示があります。これは東京でもごく一部で前の駅のものが表示されるようになったところがありますが、まだこれは東京までは来ていません。

<ビデオ上映>

これは大阪梅田の交差点です。向こう側が阪急百貨店で、左側が大阪駅ですが、上のほうを御覧ください。あと何秒待てば変わるかという待ち時間の表示があります。わずか30~40秒。大阪の人はせっかちなんです。向こうの表現で言うと「いらち」と言います。大阪の人はいらちなんです。いらちだから、信号が赤に変わってしまったら、イライラするんです。まあまあというので残時間を出して。三つ四つ御覧いただきましたが、どのニーズも、おそらく東京でこういう要求を出しても、では、東京都の交通局がそれを取り上げて開発するかという、絶対にしないはずで。ところが、大阪の交通局は開発するんですよ、何千万円もかけて。硬貨の投入口の大きいものに関しては、やはり何千万円もかけて開発をして、御丁寧にスプレーも開発しました。何のためのスプレーか

という、悪いやつがいるのを最初から想定しているわけです。ガムを詰めるやつがいるにちがいない。すると、大変なことになるわけです。ガムを詰めても大丈夫のようにスプレーを開発した。スプレーをシュッとやるとガムがクツとなるので、あとは棒でつつくと中へポトンと落ちる。それまで開発する。細かい、ばかばかしいようなニーズをちゃんと積み上げて、おカネをかけてああいうものにしていく。そういう中から、皆さんが毎日毎日お使いになっている自動改札機なども向こう発で生まれてきているわけです。細かいニーズを否定しないで、きちつきちつと対応していく。そういう意識・発想・マインドというのは、さっき御紹介した「言え」という言葉の命令形一つ見ても見えてくるわけです。今のはまだ皆さんがお笑いになるような事例でしたけれども、そういうニーズをくみ上げて、それに細かく対応することによって、実は戦後の日本の経済というのは相当支えられてきた部分があります。これは堺屋太一さんから伺って、なるほどなと思ったんですが、戦後生まれた新しい業種業態の3分の2は、大阪を中心とする関西発なんです。例を挙げておきましたが、スーパーマーケットがそうです。大阪千林の駅前（京阪本線）の店からスタートしていきまされたけれども、スーパーマーケットというビジネスモデルというのは関西発です。それから、プレハブ住宅。セキスイなどがそうです。私鉄の沿線開発。これは阪急が最初にやりました。線路を敷いて、そこに住宅街をつくり、文化施設の宝塚もつくられました。鉄道を敷いて、その周りを文化開発も含めてやっていくというビジネスモデルです。ビジネスホテルもそうです。新阪急ホテルが日本最初のビジネスホテルとして生まれるというように、ニーズをくみ上げて産業化していくということまで結びついていて、御存じのとおり、戦後の日本の社会というのは、スーパーマーケット一つ取ったって、非常に大きく支えられているわけです。もとは小さな、ばかばかしいようなニーズ。それに細かく対応することが産業化されていった例です。これは番組を通して大阪の言葉を例にやったんですが、決して大阪だけではないはずです。いろいろな地域にそういう独特の意識・発想・マインドというものが実はある。とくに戦後、共通語だ、標準語だという中で、方言はみっともない、だめだ、隠そう。首から方言札というものをぶら下げて、撲滅しようということまでやりましたので、そういう発想・意識・マインドまで一緒くたにして私たちは捨ててきてしまいました。ところが、それにもう1回光を当てて立ち上がらせていったら、果たしてどういうことになるか。非常におもしろい日本ができてくるのではないかなというのが、この番組の基本的なメッセージであります。ただ、現状はそれが各地域にまだ埋蔵

されているだけなんです。それをいかに資源として生かしていくか。こういう提言をしたつもりですが、13年前にその放送をしたあと、悪いことにグローバルスタンダードの時代になったわけです。そうなるともた効率化、論理論理という時代になってしまいました。地方分権ということは、その後、政府が調子悪くなりましたので、世の中で議論の対象になりましたが、なかなか発想・意識・マインドまで私たちの気持ちが動かなかったというのは、そういう理由があったと思います。でも、ここへ来て、やはりそういう発想・意識・マインドの重要性というものが注目され始めてきております。2000年に至るまで、90年代はとくに日本人の曖昧さというのはろくなことがない。ノーパンしゃぶしゃぶとか、官官接待とかということが議論されている中で、腹芸とか、根回しとか、どうも日本人のコミュニケーションはろくなことがない。ああいうのは全部やめましょう。すっきりさっぱり、何でも契約書でもっていきましょうというふうな風潮になって、曖昧というのは全部悪いんだというふうに一緒くたにされてしまいました。でも、本当に曖昧が全部悪いのか。確かにそのときやり玉に上げられた腹芸、一部の根回し、そういったものは私たちのコミュニケーションを長い目で見るとむしろ阻害する要因になったことは確かです。だから、悪い曖昧性、気をつけなければいけない曖昧性も確かに一方ではありますが、いい曖昧性もあるわけです。非常に貴重な、私たちの文化資源としての曖昧性というのは、さっき言った、30もいろいろなものを用意している曖昧性というのは否定されるべきものでしょうか。そうではないですね。そういうものはむしろ生かしていく。そういう曖昧性もある。そういう曖昧性に実は世界が期待をかけているという例として、ちょっと図式的で恐縮ですが、モナリザの写真を用意いたしました。これは数年前にモナリザの模写の作品を中心として「モナリザ 100の微笑」という展覧会が開かれました。そのときの図版から活用させていただきましたが、そこに出ているカラー図版はいずれもモナリザの模写です。世界の名画モナリザを様々なプロが模写をして、自分の勉強にした結果ですけれども、不思議なことにモナリザを模写すると、どこかの誰かになってしまうんです。いちばん左のものは典型的です。どこかにいる人でしょう。隣のミヨちゃんではないのですが、どこかの誰かなのです。いちばん右が原典に近いですが、これでも何か特定できるような感じがあります。そのほかのものもどこか実在の人物の感じがいたします。ところが、本物のモナリザはどこの誰でもないのです。つまり、普遍性を持っているわけです。どこの誰でもない。裏返して言うと、どこの誰でもある。究極の曖昧なのです。あれが女か男か。レオナルド・ダヴィンチの

自画像、素描が残っていますが、あれを当てはめてコンピューターで反転させると、モナリザの顔にぴったり重なります。つまり、あれは自画像である可能性が非常に高い。とすると、男ですね。男か女かも分からない。後ろの風景。あの風景はどこにもないのです。英語でいうとノーウェア。イタリアにあるかと学者が全部調べましたが、ない。どうやら海底の地形らしいですが、特定できないのです。特定できないという曖昧性を風景も持っているわけです。だから、世界の人たちが人類の宝としているわけです。あらゆる面でモナリザはほほえみも含めて曖昧です。その後の評価では、一時、さげすむ笑いというふうにとらえている人もある。今はどうでしょうか。慈母のような温かみのほほえみとみんな取っていますけれども、あの絵が生まれた当時は悲しみに満ちたほほえみなんです。ほほえみ一つ取っても様々に受け止めることができる曖昧性を持っているわけです。このモナリザに象徴されるように、実は世界の人たちは曖昧性が本当は好きなんです。だから、世界の名画になる。事実、日本のアニメーション、アニメが世界中でもてはやされておりまして。日本では自動車とか、工作機械とか、デジカメとか、家電などが輸出産業だと思われているのですが、実はゲームやアニメの占めるウエートは非常に高いものがありますし、ますます高くなっている。アニメーションの登場人物、キャラクターに対して欧米の人たちがどういう評価をしているかという、クールだというのです。クールというのは、カッコいい、頭がいい、優れている。それはたとえばポケットモンスター。カードでいくと40億万枚売れているそうです。ビデオも500万本。あのポケットモンスターが出てくるピカチュウ。しゃべらないのです。ピカチュウという、そのイントネーションで周りの人が全部分かる。いわゆる以心伝心、あうんの呼吸、それがヨーロッパ、アメリカの若い人たちのあいだでクール、カッコいい。いちいち言わなかったってみんなが分かる。そういうコミュニケーションで何だろうと思われて、アニメーションがもてはやされている。こういう事実からいっても、私は日本人が持っている独特な発想であり、それがアニメの中にはからずも出てしまっているわけですが、曖昧性、横文字で恐縮ですが、ファジーなところというのはこれから大いに可能性があるのではないかと。そういうコミュニケーションというのが、むしろ世界が待っている。「大阪弁でしゃべるデー」も実は「大阪弁でしゃべるデー 大阪弁は世界を救う」という副題をつけておりましたが、これは、ちょっとお笑いの要素も入れたわけですが、でも、半分、ポリシーでした。曖昧は世界を救う可能性があるということ。冒頭私がお話をして、今日このあとの議論の中でも展開をしたいと思っております。

しては曖昧ではなくて、できるだけ論理的にやるつもりですので、よろしくお願いいたします。
します。ちょっとオーバーしましたが、どうもありがとうございました。

司会 小池さん、どうもありがとうございました。次の御発表は常葉学園大学教授清ルミさんの「健全なコミュニケーションを模索して」です。では、よろしくお願いいたします。

「健全なコミュニケーションを模索して」清 ルミ （配布資料：p. 3～9）

清 こんにちは、ただ今御紹介に預かりました常葉学園大学の清でございます。よろしくお願いいたします。常葉学園大学というのは静岡県にございます小さな小さな私立です。そこで私は異文化コミュニケーション論と日本語教育学を教えております。今までに日本語教育では、約90カ国の外国人に日本語を教えてまいりました。ほんとに身分も年齢も多種多様な、外国人を教えてまいりました。現在は経済産業省と欧州連合の合同プログラムでありますビジネスパーソンに対する人材トレーニングがあるんですが、その研修の中の日本言語文化研修というものの責任者を兼職して18年目です。今日はその中から得た知見、そして、もう一つは、最近私が担当させていただきましたNHKの日本語講座でございます。それをつくるにあたりまして、インタビュー調査をいたしましたので、その結果などから得られた知見をもとに、経験的にお話をさせていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。まず、今日の発表のポイントですけれども、白黒つけないものの見方と^{えん}婉曲表現の重要性ということと、ちょっと対照的に見えるかもしれませんが、摩擦を恐れない不満表示とその受容の重要性ということ。全く逆のことを言っているように思われるかもしれませんが、この2点に絞ってお話をさせていただきます。まず、1点目ですが、白黒つけないものの見方というところですが、多文化関係学会という学会がございまして、そのニューズレターに竹中智泰氏が『異』『多』再考・東洋的^{えん}思惟の視点から』という論文を載せています。それを引用させていただきます。その論文のタイトルが『異』『多』の区別を建てない思惟方法』です。これは異文化理解とか多文化共生といわれているときの「異」とか「多」です。そういうものを立てないでものを見る見方にもう一度立ち返らないかということを提唱しています。どういうことかといいますと、たとえば、西洋思想はキリスト教文化に裏付けられていますが、主、客、光と陰というような二項対立、二元対立の世界なわけです。ですから、白か黒かはつきりさせます。それに比べまして東洋思想のほうは、これ

は仏教思想に基づいていますが、主とか客というのを、分かれる以前、未分というそう
ですけれども、未分以前に触れるということ、一なるものという根源的な存在を重んじ
るということを大事にします。これは古代のインド思想、それから、中国の老子、日本
で言う鈴木大拙の思想などがそうですけれども、そこでいわれていることというのは、
万物同根、すべてのものは根っこは同じである、一つであるということです。「異」とか
「多」ということを言う前に、つまり、違うということと言う前に、同じであるとい
うところから発していかないと、やはりおかしくなっていくのではないかといいこと
です。私が異文化コミュニケーションを教える際、隣の人とも異文化だということを見
つけるところから始めたりします。お雑煮の例を出したり、いろいろお互いに発見学
習をしていくのですけれども、その前に、まず、同じであるということを押さえないと
非常に危ない方向に行くということだと思います。哲学者の西田幾多郎もそうだ
ったと思いますが、ヨーロッパの見方に相当ふれてきて、そのあとで東洋的な見
方に立ち返っています。今それがまさに必要ではないのだろうと私自身感じていま
す。先ほど小池先生もふれられましたが、今指導要領の改訂に当たりまして、学
校教育では力点が、ゆとり教育の「ゆとり」から「言葉の力」へのほうに転換
が図られています。これはないものが提唱されるわけです。ゆとりといわれた
ときには、ゆとりがないからゆとり教育といわれた。今は言葉の力がないので、
言葉の力ということをあえていわれているのだと思います。今大学生を教
えておまして、ああ、変わってきたなと感じるんですが、相当言語トレーニング
がされてきている学生たちが入ってきています。どういうところで感じるかとい
うと、ディベートをすると、「誰々さんの意見に反対です。なぜならば」とい
う言い方がよく聞かれるようになったということとか、それから、「誰々さんの
言うことはこういうことですね。そこを確認しておきます。では、その次に質
問に入ります」というような言い方で自分の発言を始めたりします。私は新
人社員教育も依頼されて請け負うことがあります。新人社員教育といっても3
年目ぐらいまでですが、そういう場所で最近よく感じることは、敬語表現の語彙
レベルは非常にうまくなるのです。ところが、断りというロールプレイを
すると、「それはできません」ということをはっきり言うてしまうという
ようなことがある。どういうことかということ、大学生も、新人社員も
そうなんですが、聴き手への配慮を欠くのです。それがとても気になります。
学校の教育の中で言語技術ということが言われてきているのは、一面非常に
いいことだと思います。

ですが、その中で落としてきている部分、先ほど小池先生がおっしゃったような、ファジーな、曖昧さの部分でいい部分もあったにもかかわらず、そこを押さえずしてアメリカ式のをそのまま取り込んでしまった。かたちだけを取り込んでしまった弊害があるのではないかということを感じております。今私が教えている言語文化教育に来ているビジネスパーソンは、どういうことを言うかという、確かに日本式の決定というのは、意思決定までの時間の長さとか、会議の長さとか、誰が責任者かよく分からないとか、プロセスの説明が全くないとかいうのは本当にいやだ。イライラさせられることは多い。しかしながら、彼らが言う利点というものにこういうものが挙げられます。たとえば、よく出張で日本に来るそうですけれども、日本に来ると優しい気持ちに自分になれる。それは英語で日本人と話をしても、言葉がなくても同じである。自分が日本にいと、自分が温かな心の持ち主だと思えると言います。これは日本人とコミュニケーションを図った上での感想だと思えます。それから、Aもいいし、Bもいいけれども、Cがいいというような表現方法を日本人がよくとる。要するにチューリップの歌です。♪どの花見てもきれいだな♪というような、発想がいいなと感じるそうです。私は茶の湯のコミュニケーションということで茶の湯に連れていくんですけれども、これはなにも伝統芸術に触れさせるために連れていくのではありません。岡倉天心の『ブック・オブ・ティー』をまず読ませて、その禅的な背景をとらえてからですけれども、コミュニケーションの方法の一つとして説明をします。昔刀をはずして茶室に入った。今は時計をはずす。時間を忘れる世界。三畳間、四畳半という小さなところでひざを突き合わせて、お互いにパーソナルスペースを非常に小さく取って、お互いに和気あいあいとそこで談笑する文化。そして、その中では畳のへりを隔てて、内と外の関係というのがはっきり分かります。それから、ターンをするとき以外は、亭主の人はお客さまに対して決しておしりを向けません。そういうことの一つひとつに相手への配慮というものがあります。そういう非言語面でのコミュニケーションスタイルということすべて説明していくんです。そうしますと彼らは最後のレポートでどういうことを書くかという、我々は日本人から多くのものを学ぶべきであるということを書いてきます。とくにコミュニケーションのスタイルについてそういうふう感じていってくれます。ですから、我々はあまりにも欧米のものを崇拜しすぎて、いい面はいいと思うのですけれども、あまりにもかたちばかり追いすぎてしまって、我々の中にある良さを見落としているんじゃないか。忘れ物をもう一回取り戻す時期に来ているんじゃないかということ強く感じて

おります。同じようなことですが、NHKの日本語講座は今再放送されています。それは外国人のお嫁さんを主人公にしています。私が中身を作ったんですけれども、スキットを書く前に50人ほどの静岡県に住んでいる外国人の花嫁さんにインタビュー調査をしました。どういう日本語が必要か、どういうことが日本学校とかボランティア教室で得られなかったか、どんなことに困っているかということ吸い上げて、それを番組に反映させようと思ってインタビューしたんです。最初のうちは、特にありませんとか、とくに困ったことはありませんと言うんですが、呼び水をすると、いろいろなことが出てきます。特徴的に二つの傾向が見られました。一つは、後で述べますが、まず一つ、日本人の思いやりのある表現方法を自分たちも使えるようになりたいということを強く言います。それはなぜかというと、自分たちが住んでいる周りの人が使っている日本語は分かる。けれども、そういうふうには言えない。だから、そういうやわらかい言い方を自分も使えるようになりたいんだけど、教えてくださいとボランティアの教室で言うと、ボランティアの先生が、「そういうのはまだ難しいから、あなたはこれでいいです。何々したいですという言い方でいい」と言われてしまうというのです。確かに日本語の初級の教科書を見ても、婉曲表現は非常に少ないんですが、彼女たちは実際に地元に住んで、家族の中でたった一人外国人で、日本人に囲まれて住んでいるわけです。そうすると、そういうものを頻りに耳にしていますので、自分も同じように使いたいわけです。それがいいと肯定的にとらえているんですが、教える側がそんなことしなくていいと言っただけで済んでしまう。そこにギャップがあるということが分かりまして、そういうものも番組に盛り込みました。彼女たちが挙げたものでいいというのは、たとえば「電話が遠いんですが」というような言い方。「聞こえません」と言わない。電話が遠いと電話のせいにするような言い方をするとか、「行けたら行きます」というので期待をして待っていた。来てくれるんだろうと思って待っていたら、「行けたら行く」というのは断りだというのにあとで気がついた。けれども、本当は行きたいんだけど、行けなくてごめんなさいという気持ちの表れだったんだというのが少し分かる。最初は腹が立ったけれども、あとでそれはとてもいいということが分かった。そういう日本人の思いやり表現を自分も使えるようになりたいというような意見が強く出されました。それから、「間に合っています」。これは日本語教育で、要するに時間どおりに行くという意味の、「ああ、間に合った。ああ、よかった」というような「間に合った」はもちろん教えます。そうではなくて、足りていますという意味の「間に合う」は、もちろん教科書に出てこないわけ

です。ところが、そういう表現というのは普段よく聞くんです。そういうものもやはり自分は知らなかった。そういう表現がもしあれば、いろいろなものを取り入れてほしいというので、意識的に採り入れました。ビデオをちょっと御覧ください。二つ、スキットを御覧いただきます。

<ビデオ上映>

ありがとうございました。今のところですけれども、「いつもお世話になってます」という表現も、お世話にいつもなっていない人でも言いますよね、電話で（笑）。それから、「毎度ありがとうございます」は、初めて買ったのにと外国人は思うそうですけれども、そういうものも全部関係性を構築していく、継続するための言葉として大変大事だということで、番組ではたくさん採り入れました。そうしましたところ、昨年9月17日に朝日新聞に丸山タケシという方がテレビ構造改革というコラムを書いていらっしゃいます。その中で取り上げられまして、こんなふうに書いてくださいました。タイトルは「お見事、主婦アンナさん」というタイトルです。アンナさんというのは今の主人公です。「ここしばらくぼくの心をつかんで離さない番組がある」という書き出しで、最後のほうは「日本人の主婦も学ぶところが多い外国人妻アンナさん、かなり、やり手」。これで終わりです。ということで、かなりアンナさんのことを気に入って見てくださっているようなんですが、アンナさんの産みの親としては非常にうれしかったんですけれども、こういう見方を日本人の中でもしてくださる方がいる。日本人の方がけっこうこの番組を見てくださって、自分たちも勉強になっているというふうに言ってくださいます。今度は翻って逆のことなんですけど、もう一つ言いたいことは、摩擦を恐れない不満表示とその受容の重要性ということです。これは、どう言うか、どう聞くかのトレーニングが大変重要になってくるかと思うんですが、現状では、腹ふくるる思いとか、みんな思っているけれど、面と向かって言えないとか、そういうことって多くないでしょうか。たとえば、いくつか例を持ってきましたが、時間の関係で一つだけ出しますが、ある地方行政の国際交流の場で、現実にトラブルになっていることがいくつかございます。たとえばこういう発表の場で使ったパワーポイント、今私もパワーポイントを使っていますが、これは本人の許可なく、ほかの人に簡単に流せますね。パソコンを使って、欲しいという人にどんどん流してしまう。それから、そこで語られたことをテープおこした原稿を、本人に見せる前にネットで公開してしまったとか、テープおこした原稿を、その人のチェックなく報告書に載せてしまって、いろいろなところに配付をしてしまっ

たというようなことで、話し手からのクレームもあり、読み手のほうも、話し言葉というのは行ったり戻ったり、無駄が多いですから、非常に読みにくいということで、両者からクレームがつくということがあるそうです。実はこれらのクレームというのも、みんなが陰で言っているクレームを拾い上げて、勇気ある人が伝えたから伝わっただけで、たくさんの発表者が同じことを思っているのですが、誰も言わない。行政が相手だから、言いにくい。すでにかたちになってしまっているから言いにくいし、角が立つから言えないというようなことです。コミュニケーションを大事にしている国際交流の場ですらそうですから、それ以外にも医療現場とか、私どもの職場でもいろいろな例があるのですが、やはりみんなが腹にためているのです。そういう状況というのはいかに不健全かということ。また、最後の「臭いものに蓋^{ふた}をする」というのは、コミュニケーションだけではなく、今の教育の中で、たとえば静岡県^{しずま}の例ですと、防空壕^{ぼうくわう}がたくさんそのまま残っているわけです。そこで遊んで、その中で火災を起こしそうになった小学生のことが大きい問題になりまして、防空壕をふさぐべきである。行政が主導してふさいでいくには予算がない。やっぱりふさいでほしいという親のほうの意見がありました。ふさいでどうなるものかということ。危険だといわれたら、ふさいでいけばいいのかということ。それよりも、危険だということを語り伝えていく。あそこで遊んではいけないよということを語り伝えていって、危険を未然に防ぐということが生きる力になる。ですから、刃物を全部なくさせればいいのかということですよ。そういう発想にすぐに結びついてしまうところは、少し問題があるんじゃないかと思います。どうもコミュニケーションという我々はすごく極端に、さっき言ったような、ロジックとか、論理性とかいうことを非常に大事にするか、あるいは極端に、今の方向で言うと、円満で、いい関係のコミュニケーションを探るあまりに、摩擦を恐れてしまって、腹にため込んでいる。その結果、最後のところでキレたり、自殺をしたり、爆発したりというようなことになってしまうのではないかと思います。これは極めて不健全ではないでしょうか。これから私たちがやっていかなければならないことは、怒るべきときに怒りを表すとか、クレームを建設的につけるとか、悲しいことは悲しいんだということだと思えます。そういう意味で「男は黙ってサッポロビール」の世界はもう古いんじゃないかと思います。先ほどのNHKの外国人のインタビューのときに、実は彼女たちからもう一つ特徴的に出ましたことは、自分たちは不満をいっぱい抱えているんだ。自分のとくに夫に対して、お姑さんに対して、保育士さん、周りの人たち、大人に対して、「私だっ

てこんなにやってるのよ」と言いたいのに、それが言えない。なんでもかんでも日本人並みを要求されて、ものすごく腹が立って、爆発したいんだけど、爆発する日本語を持っていない。だから、中国語でパーッとときどき爆発するそうです。そうすると御主人がそばで見ていて、へらへらして、「えっちゃん、かわいいね」とか言われてよけい頭に来るんだけど、怒りを表せないと言うんです。「頭にくる」という単語さえ知らないんです。インタビュー中ただ、顔を真っ赤にして私に訴えている。その表情で私のほうはそれを伝えたいんだなということを読み込んだわけですが、そういう人が山ほどいらっしゃいました。言えないんです。なぜ言えないかということですが、やはりいろいろなことがあって、言葉を知らないということ、それから、ボランティアとか日本語学校で、それを言いたいから教えてと言っても、「けんかはしないほうがいい」とか、「言わぬが仏だよ」とかいうふうに諭されてしまうということです。逆に我々が彼女たちから学ぶということもあっていいと思うんです。不満を出すということ習っていくということはあると思うんですが、どうも押さえ込んでしまう傾向が強いということと、教科書を見ても、感情表現が非常に少ないんです。不満だけではありません。感謝を具体的に伝えるとか、それから、喜びを具体的に相手に伝えるというのも本当に少ないんです。この番組にはそういうものも極力入れていったんですけども、そういう点も一つだけ御覧いただけますでしょうか。

<ビデオ上映>

フィリピン人ですから、漢字が読めません。

<ビデオ上映>

夫婦げんかというあまり語学の教材にはないところですが、4週に1度だけけんかをさせています。そういうことで、ちょっと不満を放出する。それから、オノマトペ、ウキウキとか、ハラハラとか、ドキドキ。こういうものも彼女たちはなかなか言えないんです。「うれしいです」は言えるんですが、「ウキウキ」が言えない。我々は非常に豊かにそういうオノマトペを使って表現をしていることがありますので、そういうものもたくさん盛り込みました。ということで、我々は彼女たちから学ぶところがあると先ほど申し上げましたが、表出をしていく、とくに私から公に、それから、小さいものから大きいものへ、子供から大人へ、下から上へ、それから、無力なものから権威のあるものへというようなところで、思いを封じ込めずに表出することが許される、閉じ込めずに許される世界というものをこれから築いていく必要があるんじゃないかと思います。その

ときに、どう出すかの問題と、どう受け止めるかという問題がとても大事だろうと思います。これは異文化コミュニケーションでは非言語メッセージと言語メッセージ、同文化の中の二人で言いますと、いろいろな研究がありますが、大体70%ぐらいが非言語メッセージで伝えるといわれています。それぐらい言葉に頼らないで伝えているものの方が多いです。ということで、非言語面の配慮も含めてどう受け止めるか、どう聞かかということがとても大事になっていくのではないかと思います。まとめます。今日私が申し上げましたのは、最初に言いましたように、東洋的な見方をもう一度見直す必要があるのではないかとということと、摩擦を恐れない不満表出を容認していく必要があるのではないかと。以上の2点です。どうもありがとうございました。

司会 清さん、どうもありがとうございました。最後になりましたが、三つ目の御発表は、立教大学教授箕口雅博さんの「コラボレーションとコミュニケーション」です。では、よろしく願いいたします。

「コラボレーションとコミュニケーション」箕口 雅博

(配布資料：箕口 p. 10~16)

箕口 皆さん、こんにちは。立教大学の箕口といいます。よろしくお願いします。私は立教大学のコミュニティ福祉学部という学部で、社会福祉とか、精神保健福祉とか、そういう福祉領域の専門家、それから、臨床心理士といったような心理領域、そういう対人援助にかかわる領域の専門家を養成するところで教えています。専門は、御紹介のところにもあるように、コミュニティ心理学というものを専門にしております。コミュニティ心理学とはどういう学問なのかも含めて、これからお話ししていきたいと思います。今日お話しするポイントとしては、コミュニティ心理学の立場から、とくに今学校の中にスクールカウンセラーが派遣をされて、各学校で活動していますけれども、そういう学校でのカウンセリング場面において、コミュニケーションを成立させやすくするための環境づくりのポイントとは何なのかということを中心にお話をさせていただきたいと思います。キーワードとしては、コミュニケーション、コーディネーション、コンサルテーション、コラボレーションといったような、すべて横文字の、大変不釣り合いですけど、これからお話しするコミュニティ心理学のコミュニティという言葉も、日本語としてまだ十分に定着していない言葉ではないかと思いますけれども、キーワードに挙がっている言葉も、今までのお2人の先生方のお話にもあるように、なかなか日本語

として十分こなれていない言葉、概念ではないかと思いつつ、お話をさせていただきます。今お話したコミュニティ心理学というのはどういう学問かというと、もともとコミュニティ心理学が誕生したのはアメリカです。1960年代のアメリカで誕生した学問です。1960年代のアメリカの大統領はジョン・F・ケネディですけれども、そのケネディ大統領が大統領教書を発表するんですけれども、その中で、それまでのアメリカのとくに精神科の治療、精神障害者に対する治療が、非常に巨大な精神病院に閉じ込めておいてというような、いわばかなり人権を侵害するようなかたちで治療が行われていたのを改善しようということで、州立病院をすべて閉鎖して、そこに入院していた精神障害の方を地域に戻して、地域の中でケアをしていこう。そういうところから地域精神保健という活動が始まったわけですが、そこに一緒にかかわる心理の専門家たちが、自分たちのアイデンティティというか、自分たちの役割というか、仕事としてコミュニティ心理学という領域を立ち上げようということで生まれたものです。皆さん、カウンセラーというのはどういう方か、ある程度イメージを持っていらっしゃると思いますけれども、今まではもっぱら個人を対象に、個人の心の内面にかかわっていくとか、そういうかかわり方を主な仕事にしてきたんですけれども、コミュニティ心理学では、個人もちろん対象にしますが、それだけではなくて、個人を取り巻く人たち、それがたとえば家族であったり、学校の先生であったり、地域の人たち、あるいはほかの領域の専門家、そういう人たちと協力しながら、その問題を解決していこうという発想が根底にあります。そういう意味でコミュニティ心理学は個人と環境をいわばつなぐ役割というか、そういうつなぎ役として活動していく。それがコミュニティ心理学のいちばんのポイントになると思います。ということで、実際にこれからは学校の場面です。今我々の学校で起きているいろいろな問題とか課題を考えていくと、たくさんあると思います。とくに子供たちの不登校の問題はかなり前からありましたけれども、いじめの問題もそうですが、最近は学級崩壊という現象が全国でかなり起きています。それは要するにクラスの授業が成り立たない状況です。子供たちがクラスの中で勝手に歩いたり、教室の外に飛び出したり、子供たち同士でトラブルを起こしたり、そういう状況が今実際の学校、あるいは学級の中で起きているわけです。そういう問題をなんとか解決できないだろうかということで、一つは、今から十数年前にスクールカウンセラーという制度を文部科学省がつくって、予算をつけて、これまでは主に中学校にスクールカウンセラーを週1日か2日派遣をしたわけです。実際に週1日、あるいは半日ですけれども、スクー

ルカウンセラーが各中学校に行き、多くは学校の中に相談室をもらって、そこに相談に来る子供に対して相談をするというのが基本です。実際の学校でそういう相談室をつくったとしても、そこに子供たちが自分の問題で相談に来ることは、多くはほとんどないです。そういうことから、スクールカウンセラーは学校でどういう援助というか、あるいはどういうサービスが提供できるかというふうを考えていくと、子供たちの援助をターゲットにするよりは、むしろ学校の先生とか、あるいは保護者とか、学校全体のいわばシステムというか、環境というか、そこに働きかけていく必要があるのではないかと思います。余談というか、ちょっと生々しい話ですが、実際にスクールカウンセラーが今各学校に派遣されています。当然、報酬が出ているんですが、その時給はいくらぐらいだと思いでしょ。この中に、自分のお子さんの学校にスクールカウンセラーがいる、あるいはいたという経験をお持ちの方はいらっしゃいますか。手を上げてください。今お手を上げていただいた方、スクールカウンセラーは時給いくらぐらいもらっていると思いますか。

参加者 1200円ぐらい。

箕口 1200円ぐらいですか。そうですね。実際は時給が5500円です。もちろん交通費がかかりますし、1日4時間、あるいは8時間、それだけの報酬をもらって働いているわけです。どうですか、感想は（笑）。

参加者 いいお仕事ですね。

箕口 そうですね。ただ、それは皆さんの税金ですよ。税金で払われているわけですが、では、それだけの時給を払って、スクールカウンセラーはただ相談室に座っているだけではほとんど何も起こらないです。子供がときどき遊びに来るぐらいのものです。それで時給5500円もらえる。すごくいい仕事ですね。けれども、そういうスクールカウンセラーは、1年契約ですけれども、次の年は全く契約をクビになってしまうと思います。では、スクールカウンセラーを十分に活用するためにはどうしたらいいのか。先ほど小池先生のほうからニーズにどう応えるかとか、ニーズをどのように取り入れたらということが言われていますけれども、スクールカウンセラーの多くは臨床心理士という資格を持っている専門家ですが、では、それだけのお金を払って、学校側としてはスクールカウンセラーにどういうことをやってもらいたいのか、あるいは保護者である皆さんがスクールカウンセラーにどういうことを期待するかということを、ちょっと考えていただければと思います。悩みを抱えた子供に対するカウンセリングとか、支援とか、そう

ということが基本ではあると思いますけれども、そのほかに期待できることとして、たとえば、ここに示してあるような、2番目の、学校の中で起きている実際のいろいろな問題があります。そういう問題全体、学校そのものに働きかけていくというようなことが一つ考えられます。それから、保護者に対する啓発、教育活動です。学校を取り巻く環境への働きかけということです。実際に今スクールカウンセラーの人たちは、その学校のPTAの主催で、たとえば思春期の子供の心理とか、反抗期の子供に親としてどう対応するかとか、そういうテーマでその学校に来ているスクールカウンセラーが保護者の皆さんにお話をするということをやっています。それから、もう一つ必要なのは、学校の先生というのはすごく大変なんです。やるべきことが非常にたくさんあります。授業だけではなく。部活とか、そのほか。ぼくは週に1回ですけども、町田市にある町田市民病院の神経科で病院のクリニックもやっているのですが、そこにも学校の先生がかなり受診をします。とくに新人の先生たちが最初はすごく頑張ってやるんですけども、とても対応しきれなくて、たとえばうつ状態になって病院に来るといような先生たちが今増えています。そういう先生たちのメンタルヘルスの問題を支援していくということも重要になると思います。そのほかにも学校側のニーズはたくさんあると思います。それにスクールカウンセラーはできるだけ応えていく。そのためには非常に多様なというか、様々なニーズに応じたサービスを提供していく必要があるのではないかと思います。一つの事例を出します。これは架空の事例ですけども、中学1年生の男の子で、2週間前から断続的に学校を休んでいる。3日前からは全く学校に来なくなってしまった。そのクラスの担任の先生が家に電話をすると、お母さんは出てきてお話はできるんですけども、その子とは直接お話ができない状態である。クラスの子供たちに家庭訪問させても、その子は全く会おうとしない。要するに全くコミュニケーションがとれない状態です。そういう状態にある子供に、とくに担任の先生が担任としてどのようにかかわっていったらいいだろうか、その子のことをどのように理解したらいいのだろうかというときに、スクールカウンセラーが登場するわけです。その場合、スクールカウンセラーのやり方としては、いきなりその子に対して、スクールカウンセラー自身が家庭訪問をしたり、あるいはその子に心理テストをしたり、そういうかかわり方はまず効果がないというか、逆効果になってしまうので、一つはコーディネートということですが、要するにスクールカウンセラーもその子とある程度かかわりながら、学校のクラス担任の先生が家庭訪問をする、あるいはクラス担任ではなくて、たとえば、その

子がよく保健室に来ていたとすれば、保健室の先生に家庭訪問をしてもらうというようなかたちでお願いをする。それから、もう一つはコンサルテーションという方法があります。これは直接その子にスクールカウンセラーが援助をするのではなくて、スクールカウンセラーがコンサルタントの役割をとるわけです。そして、学校のクラス担任の先生がコンサルティアー。その場合の2人のコンサルタントとコンサルティアーの関係は、コンサルタントは心理の専門家であるスクールカウンセラーです。コンサルティアーのほうは教育の専門家であるクラス担任、学校の先生です。その二つの異なる専門家同士が協力し合って問題解決に当たるという方法です。最初に言ったコーディネーションを図式に表すとこのような形になります。カウンセラーが生徒ともかかわりながら、学校の先生、とくにクラス担任というのはその生徒にとってはいちばんかかわりが深い関係ですが、その担任の先生が生徒に援助をしていくというか、コミュニケーションをとっていくということ協力を依頼するということです。これがコーディネーションというかかわり方です。それから、コンサルテーションというのは、先ほど言ったように、カウンセラーが生徒には原則として直接的にかかわっていくのではなくて、その生徒にいちばん影響力を持っているクラス担任の先生と一緒に話し合っ、その先生が生徒をどのように理解して、どのようにかかわっていくかをできるだけ具体的な話し合いをしていく、あるいは場合によっては助言をするというようなかかわり方です。それから、今日のテーマであるコラボレーションというのは、さらにその関係を深めた関係です。ここではスクールカウンセラーと教師がチームを組んで、話し合いを重ねながら、生徒へのアプローチの方針を考え、目標と計画を共有し、役割分担して計画を実行する。要するに役割分担をきちっと分かって、それぞれの専門性の中で、その生徒とかかわっていくということです。それがコラボレーションです。日本語に訳すと、コラボレーションというのは最近割といろいろなところで使われるようになりましたけれども、協力の協という字と働くという字の協働です。ともに協力し合っ、何かをなし遂げるというか、それがコラボレーションという言葉の中に含まれている意味だと思います。コラボレーションがうまく実行されると、スクールカウンセラーと教師それぞれの専門性が向上する。それぞれがいわば成長していく。新たな援助のやり方ができあがっていくということです。そういう意味でコラボレーションですと、とくにこの場合はカウンセラーと教師が相互の協力関係をもちながら、双方がそれぞれの専門性をもって援助をしていくということです。コラボレーションの要素として考えられるのは、お互いのまさにコミュニケーシ

ョンにも通じる部分ですけれども、相互性です。それから、目標を共有しているということ。それから、リソースの共有。リソースというのは、それぞれの持っているいわば資源というか、役に立つ、使えるものです。役に立ちそうなものを共有する。それから、計画性というか、見通しを持つということ。それから、できるだけ対話をしていくというかわり方です。その結果、先ほどの繰り返しになるかもしれませんが、更新というのはちょっと分かりにくい概念ですけれども、要するにコラボレーションを進めていった結果、自己に対する見方とか、自分自身の役割を改めてとらえ直すことができる。それがその次の専門性の向上にもつながっていくわけです。専門技術の向上とか、コミュニティに新たなシステムを作るということです。それから、コラボレーション参加者にお互いの一種の共同体が成立する。参加者それぞれをサポートするような共同体が継続的に、その後、コラボレーションを進めていく結果、そこに継続的にそういう共同体が成立することがいわれています。それでは、コラボレーションをしていくために求められる技術としてはどのようなものがあるかということですが、一つは、これは資料には載っていませんけれども、対人関係の技術があります。それから、問題解決をしていくための技術。組織を扱う技術です。それから、グループを扱う技術です。それから、文化的な差異、あるいは共通点を認めつつ関わっていくということです。また、先ほども清先生の中でちょっと触れられましたけれども、倫理的、専門的行動です。要するにそこでお互いに得られた情報をどのように共有するのか、あるいはそこで得られた情報をどのように守っていくか。守秘義務とか、そういうことをきちんと守っていくことが必要であるということです。それから、コラボレーションについてはたくさんの研究がなされているのですけれども、そこでいちばん共通していわれていることが、コミュニケーションをいかに進めていくかというか、コラボレーションをしていく上でコミュニケーションの技術が共通して非常に重要であるというふうに指摘されています。そういう意味で今までの話をまとめてみますと、学校カウンセリングにおいては、学校という場、いわば環境を、生徒、保護者、教師にとっていかに生活しやすいものにしていくかという視点が重要となります。つまり、それは言い換えれば、お互いがコミュニケーションしやすい場をいかにセッティングしていくか、作っていくかということではないかと思います。これも資料にはないのですけれども、コミュニケーションというのはコラボレーションが成立するための基本的な要素であり、技術であるというふうに言えるのではないかと思います。最後に、ぼくがいつも学生たちに言っているコミュニティ

心理学のキャッチフレーズがあるので、それを皆さんにお示ししたいと思います。軽快なフットワーク、綿密なネットワーク、そして、少々のヘッドワークです。ヘッドワークは少々であることが重要である。フットワークとネットワークを最大限に生かしてコラボレーションできる専門家に育ててほしいというふうに学生たちには常に言っています。以上です。ありがとうございます。

司会 箕口先生、ありがとうございます。それでは、これでお三方の御発表が終わりました。これから休憩に入ります。時間が10分ほど延びておりますので、あちらの時計で3時30分まで休憩をとりたいと思います。それから、先ほど申し上げましたが、この時間内で質問票を集めたいと思います。係の者が回りますので、そちらのほうにお渡しください。それから、ロビーのほうで本の展示や販売もしておりますので、そちらも御覧ください。それでは、よろしく願いいたします。

<休 憩>

【ディスカッション】

司会 (熊谷) それでは、後半に移りまして、ディスカッションに入ってまいります。後半は先ほどお話しいただきました小池先生、清先生、箕口先生、そして、国立国語研究所所長の杉戸という構成でお送りいたします。私、熊谷が司会進行を務めます。どうぞよろしくお願いいたします。まず、ディスカッションの始め方としまして、休憩時間にいただきました、前半のお話についての質問にお答えするというかたちで始めたいと思っております。質問、たくさんお寄せいただきましてありがとうございました。それをいろいろ見ましたところ、かなりの人数の方々が、三つのお話の中に出てきた、はっきりものを言うとか、論理的にものを言うということと、あとは婉曲的かというと、相手との関係も気にしながらものを言うということの兼ね合いはどうするか、具体的にどんなふうにしていったらいいんだろうというような質問をお持ちでした。そのことはまた、あとの議論の部分で具体的に3人の先生方にもお話しいただくということで、まずは、少しそれとは違った部分の質問を、それぞれの方々から、大体5、6分程でしょうか、選んで、たくさんありますので、もしかして全部答えきれない場合はお許しいただきたいのですけれども、そんな感じで、小池先生から順にお答えいただければと思います。

小池 私がちょうどした御質問は、資料の出だしのところに関して、導入のところ「ギスギスする論理性ではなく、「のびのびできる合理性」について」であるという言葉があ

ります。その意味がよく分かりませんでした。具体例を教えてくださいという御質問です。こういう御質問をいただくということは、私の話がちっとも伝わっていなかった（笑）ということになってしまうわけで、大変答えにくいのでありますけれども、「ギスギスする論理性」というのは、ニュアンスとして、あまりいい感じを持っていないなということは受け止めていただけると思います。実はここに参加するにあたって、なぜか昭和40年ごろ私が読んだ『人間の建設』という本を一通り読み返しました。それは岡潔という数学者と小林秀雄の対談です。なぜその本を手にしたかという、ちょうど今、藤原正彦さんという方がときめいていらっしゃるしまして、お茶の水女子大学教授で、数学者です。大変社会的な問題について、教育について発言をし、それが支持されています。『国家の品格』という新書がベストセラーになっております。数学者が世の中のことについて発言するという事は非常に大事なんですけども、必ずしもそんなにしょっちゅうない。そういえばというので、昭和40年ごろ出ていたその本を引っ張りだしてきて読んでわけです。岡潔さんが中で言っていて、ああ、当時そうだったなとつくづく思ったのですが、アメリカは麻薬に走る人間が非常に多い。あれは論理々々、理性々々でギリギリとやられていて、そっちのほうに走っていくのであるというようなことをあそこでは言っていました。やはり論理、理性というのはそういうところがあると思うのです。同じ本の中で小林秀雄はこういう言葉を言っています。あらゆる角度から弾が飛んできてもいいように、いろいろなメモを私は作ってきました。したがって、どこに書いてあるかが分からないのでして（笑）、大変大きな欠点を……。小林秀雄はその本の最後のほうで、「愛情には理性は持てるが、理性には愛情は行使できない」という小林秀雄らしい言い方をしています。論理とか理性というものは、愛情にはそういうものが持てるけれども、論理とか理性は愛情を行使できないという言葉がその中で言っていますが、どうもやはりその当時から、小林秀雄とか岡潔さんというのは、論理というものに対してすぐに飛びつかないで、それが数学者であるということが非常におもしろいなと思いました。「ギスギスした論理」の話に戻らなければいけないのですが、アメリカのそういう社会を連想していただければお分かりいただけると思うんですが、たとえば夫婦のあいだで別々に弁護士を雇って、いつ何どき離婚の話になってもいいよということ、訴訟社会になっているわけです。それが論理、論理でずっと社会や国をつくっていったときの最終的な姿になっているのではないかと私は思います。そういう弁護士社会、訴訟社会にこれからの日本が向かっていくのだろうか。論理的な人間を育てるんだとい

うのがまた学習指導要領の中で出てきていますけれども、果たしてそういう論理論理でいいのか。むしろギスギスした妙な社会ができてしまうんじゃないか。そういう危惧を持っています。日本人は非論理的な人間が多いというふうにこれまでも言われてきましたし、あうんの呼吸や以心伝心や腹芸などが全部否定される中で、曖昧な表現というのが打ち捨てられようとしてきたわけです。けれども、今日、大阪の言葉を例に御紹介したとおり、合理的なんですよ。合理性を持っているんですよ。ファジーだけれど、曖昧だけれど、相手のニーズを発見した瞬間には合理的なんです。ひところ、ファジーな掃除機というものがありませんでした。ファジーな掃除機というのは、ウィンウィンウィンと回転しながら、ごみがあるところになるとビューンと回って吸うのがファジーな掃除機です。あれなんですよ。ここぞと思ったら、合理性に転換するのがファジー。掃除機の場合はそういうものでしたけれども、私は合理性というのはそういう肉付けを持った、血肉が通った論理と言いましょか、その中に論理が入っているだけけれども、理にかなっている。そういうコミュニケーションを日本人は大事にしてきたはずで、それをあるときから否定に回ってしまったために、様々な問題が引き起こされている。合理性のあるコミュニケーションというのは、実は私たちの中から出てきたものだから、本来、合理性のあるコミュニケーションを交わしているときに、私たちがいちばん身も心ものびのびできるはずだという意味合いで、「ギスギスした論理性」ではなく、「のびのびとした合理性」についてであるというふうに申し上げたわけです。ただ、「のびのびとした合理性」、身も心ものびのびできるというのは、ただ放っておけばそういうふうになるというふうに勘違いされやすい。日本人だから、アジア人だから、放っておけば自然にそうなるんだ、努力しないというふうに勘違いされやすいので、この後の議論の中で是非、そう簡単にそれが実現できたり、身についたりするものではないということは申し上げたいと思います。そのような意味合いでこの言葉を使ってみたわけです。少しは伝わりましたでしょうか。大変に申し訳ございませんでした。

司会（熊谷） ありがとうございます。それでは、清先生。

清 たくさん御質問をいただきましてありがとうございます。私は不満表出の問題と摩擦を恐れないというところに対してたくさんいただきました。これはのちほどディスカッションで触れさせていただきます。それ以外のものは大きく分けますと二つに分かれます。まずは、日本語教育からのお立場からの御質問が3点、それから、異文化コミュニケーションサイドのものが2点ございます。まず、日本語教育のほうからお答えいたし

ます。50代の方から、仕事にしる、ボランティアにしる、外国人に日本語を教えるということに関心がある。どのような勉強をしたらいいか。それから、年齢的に遅いかという御質問なんですけど、決して決して遅くありません。人間長くやっていたらいい方のほうが、それだけ厚みのある人生経験に裏打ちされた支援がおできになるんじゃないかと思います。ですから、やりたいと思ったときがスタートのときだと思います。そのための勉強の方法はいろいろございますが、アルクという出版社から『月刊日本語』とか、『日本語教師読本』という本が出ています。まず、そういう出版物に最初ざっと目をお通しになって、それから、ボランティアのセミナーなどにいらっしやると、大体どんなふうにしていったらいいかがお分かりになるんじゃないかと思います。それから、これは日本語教師の方で、日本語教育をするには、相手の方の母国語の理解度はどの程度必要かという御質問なんですけど、それはもちろん100%というか、理解できるに越したことはないと思います。ただ、必ずしもそれが絶対に必要かというのと、そんなことはないと思います。やはり相手の困っていることに対して、どれぐらい自分自身がそれを受け止めることができるのか。全く言葉が通じないところでは難しいと思いますけれども、もし誰か立ってくれる通訳がいるとか、あるいは相手なり自分なりが、つたない言葉であっても少し会話ができるのであれば、あるいは媒介語として英語が使えるのであれば、問題ないだろうと思います。言語ができないから日本語教育ができないということはないと思います。ちなみに私の場合外国語は不得手です。日本語もおぼつかないというようなところですけども、問題ありません。それから、外国人の方からの御質問で、私の発表のポイントが日本語の習得度と、それから、外国人の出身の地域等の関連はどうかという御質問ですけど、習得度と私の発表のポイントはあんまり関係ないと思います。たとえば初級レベルの日本語であっても、その中で十分できることだろうと思います。それから、地域との関連でいうと、もちろんステレオタイプのものを見てしまうのはあまりよくないんですけど、ある程度の傾向はあります。たとえば私は18年間、EUの方々との仕事をしてきましたが、あとから加盟してきたフィンランドという国があります。フィンランドの言葉の表現は日本語に比較的近いんです。彼らは「湖の周りを回る」というふうに言います。湖の周りを回ってくる表現方法。要するに婉曲的に、丸く言うんです。そういう表現方法をとります。それから、アジアで言うと、ミャンマーのような国の方は日本人に比較的表現が近く、遠慮がちにものを言います。インドネシアも、人前で不満表出をすることは恥ずかしいことだという文化のようです。ですから、そうい

うところでは比較的日本語で同じような表現方法をとることは容易ではないかと思いませんし、逆に言うと、文脈に頼らないで言葉に頼ってものを言っていくような言語のところ、たとえば、ドイツ語とか、そういうところでは、心理的にまずバリアーがあって、日本語のような表現方法を取りたくないというふうに思う方もいらっしゃると思います。でも、これはステレオタイプ的に見るとそう見えますが、最終的には個人差だと思います。日本人の中でもいろいろな日本人がいるように、一人ひとりの問題ではないかと思っております。以上が日本語教育からの御質問でした。次に、異文化コミュニケーションの視点からお二方いらっしゃいます。まず、非言語コミュニケーションの問題で、『人は見た目が9割』という御本があるそうで、その中で、顔の表情が55%、声の質、大きさ、38%、計93%を占める。これどう思いますかということです。いろいろな研究の結果がございまして、この研究も確かにございます。それもやはり受け手の側がどう受け取るのかの問題と、それから、同じ文化の中にいるのか、それから、どういう環境と文脈の中でそれを理解するのかによってデータは違うと思うのですが、ただ、言えることは、顔と声の質、大きさ、質とか大きさとかはあえてパラ言語と言われますが、そういうものだけでなく、体物表現と言われているもの、たとえば、私は今日着物を着ているとか、こういう髪形をしているとか、口紅は何色とか、それは全部体物表現といいます。こういうものもすべてコミュニケーションのメッセージです。ですから、そういうものを全部トータルに含めて、我々はその人が口をきく前から、すでに判断をしているということは十分ありうると思います。実際にいろいろなところで審査員を仰せつかるんですが、必ずしもスピーチコンテストだけではありません。たとえば、某ミスコンテストなどの審査員も仰せつかるんですが、壇上に上がるときにもう大体この人入るなど分かります。スピーチコンテストでもそうです。不思議なことですが、即座にこの人は上にいくというのが分かります。それは歩き方とか、その人の態度とか、そこから人を引きつけているんです。そういうようなところというのはかなり大きなファクターではないかなと、私は実体験として感じております。それから、次に謝罪について。日本人は「すみません」とか、「申し訳ないです」とか、すまないと思っていないのに謝罪する場合が多い。こういう場合に、その人は謝罪しなかったことになるのでしょうか。どのようにとらえたらいいのでしょうかという問題です。謝罪ということに関しては、異文化コミュニケーションの分野でも謝罪をどうとらえるかということでまず違うんです。日本人の場合には、「すみません」とか、「申し訳ないです」というのは、心から自分自身に非があると

いう、責任を認めるということではなく、あなたにすまない思いをしましたという、相手を傷つけたことに対して、気持ちを共有するというか、共感するというために一応謝るというのがあるんです。だから、必ずしも悪いと思って責任をとりますと言っているわけではないのです。これがなかなか分かってもらえなくて、「すみません、すみません」と日本人はすぐ謝ると言われるんですが、謝っていて責任をとるのでなくて、相手に対してちょっと傷つけたとか、相手が不快な思いをしたことに対して、そのことについて悪かったわねと言っているだけということが多いのです。ところが、これがたとえば日中の問題になると摩擦を生じさせまして、このあいだ中国でずいぶん反日運動が起きましたね。靖国の問題とか、いろいろあります。ああいうものも中国の方からいろいろ話を聞きますと、中国側の謝罪というのは、「すまない」と言ったら、それが具体的に行為として責任をとらない限り認めないそうです。いくら「心から申し訳ない」とか、「心からおわびします」と言っても、それは謝罪にならない。そういう文化です。ですから、謝罪をどう受け止めるかというのが文化によって違うと言えるのではないのでしょうか。以上です。

司会（熊谷） ありがとうございます。箕口先生にもいくつか質問が来ております。よろしくお願ひいたします。

箕口 いくつかの御質問、ありがとうございます。大きく分けると学校カウンセリングの内容についての御質問がほとんどですけれども、あとはコラボレーションについての御質問です。まず、学校カウンセリングについては、やはりちょっとインパクトが強かったみたいで、スクールカウンセラーの時給について（笑）、それは妥当なのかどうかという御意見がありました。学校関係者の方で、実情をよく御存じの方のようで、たとえば校医さんがいまして、校医さんと同じ。だから、5500円よりもっと高いですね。8500円だそうですねけれども、自治体によってはスクールカウンセラーも校医さんと同じような時給をもらっているところもある。たとえば、不登校の子供がスクールカウンセラーがかかわることによって学校に来るようになったことは、経験的にほとんどない。ひまなときは事務室でお茶を飲んだり、図書室で読書をしたりの姿も見かけますというような非常に厳しいお言葉もあります。一方で、民間というか、地域の中にフリースクールとか、フリースペース、あるいは学習塾のようなところでは、そこにも不登校とか、そのほかの子供たちが来ています。むしろそういう民間のフリースクールに来ている子供のほうがまた学校に行くというような場合が多いのではないかと。実際よく自身も、大学

が埼玉県の新座市にあるものですから、新座の地域にもいくつかのフリースクールとか、不登校の親の会とか、そういう民間のグループがあるんですが、その人たちとも一緒にかなりやっています。確かにそこに来る子供のほうが……。不登校の問題を考えると、難しいのは、学校に行くことがその子にとって治ったというか、良くなったことなんだらうかという問題がありますが、一概に言えないと思うんです。ただ、もう少し長い目で見ると、学校に行かなくても中学校は卒業できますけれども、中学校を卒業したあとに、その子がどう生きていくのかというか、社会の中でどう自立するかということ、を視点に入れたかかわり方というか、支援がやはり必要ではないかと思います。そういう意味では、やはり御指摘のように、むしろ民間のフリースクールのようなかかわり方のほうがその子にとってはという面もあると思います。そういう意味では、今のスクールカウンセラーの時給が妥当かどうかという面では、なかなか難しい問題です。それから、もう一つ、例えば子供が学校で飼っているウサギを殺したとか、そういう事件がけっこうあります。そういう行動をしてしまう子供自身も非常にかわいそうに感じます。そういう子供たちにどのように接したらよいのでしょうかという御質問です。最近の子供はインターネットなどのデジタルコミュニケーションの手段を使う、長崎の事件がそうですが、女の子が教室で殺したけれども、一つはインターネットでのやりとりの中で、ということがあると思います。そういう子供たちをどのように指導したらいいのかという問題とか、それから、子供たちの家族への働きかけをどのようにお考えですかということ。今の日本社会の中で、そういう子供たちの攻撃性というか、あるいは衝動性というか、それが非常に目立つ事件とか出来事がすごく増えています。その問題を学校教育の中、あるいは家庭の中でどのように対応していくかというのはすごく大きなテーマになっていくと思います。そういう意味でも、お話ししたような、たとえばスクールカウンセラーがその学校だけではなくて、地域全体ともかかわる中で、問題にコラボレートしていくというか、そういうことが必要な時代になったのかなと思っています。あまりお答えになっていないかもしれませんが。それから、あとはコラボレーションについて、コラボレーションを十分に進めていくために参考になるような本としてはどういうものがあるのかということ。一つだけ挙げさせていただくと、至文堂というところから『現代のエスプリ』というシリーズで出ています。毎回、主に心理関係にかかわるテーマで特集を組んだ『現代のエスプリ』という論文集です。その中で、確か2年ぐらい前ですけども、亀口憲治という東大の教育心理の先生が編集した、まさに『コラ

ボレーション』というタイトルの本が出ています。これがかなり具体的で、参考になるのではないかと思います。最後ですが、これはある意味ではタイムリーというか、非常に重大な事件ですけれども、滋賀県で幼稚園の子供2人を殺したお母さんの問題。この事件についてどのように考えられますかということです。これは清先生にもかかわる部分だと思いますが、ただ、まだこの事件は実際にどういう動機で殺したのか、全く詳細が分かりませんので、そう簡単に何らかのコメントをするというのも非常に難しいと思います。推測ですが、中国の方ですよね。中国の方で、日本での生活の中でたまっていたというか、そういう部分があって、それがああいうかたちで爆発したというか、そういうことまではある程度推測できると思います。それをどうしたらいいかというところは、まだくわしいところが分かっていないので、なかなかコメントしづらけれども、清先生、お願いします。

清 今箕口先生がおっしゃったように、まだ原因究明がなされていない、本当に起きたばかりの事件ですので、軽率にいろいろなコメントがしにくいのですけれども、ただ、やはり推測できることは、腹にかなりいろいろなものをためていたんじゃないかと思えます。それをもう少し違ったかたちで出していたら、防げたかもしれない事件ではなかったと思います。私も実は身近に、昨年ですけれども、私の教え子のお父さんにあたる人がやはり中国人に刺されて殺されました。公判に行ったり、いろいろなところを私も経験したんですが、やはり本当にいろいろなものを、思ってもみないものをためているということがあるんじゃないかと思えます。

司会（熊谷） ありがとうございます。非常に多岐にわたる御質問を会場からいただきまして、ありがとうございました。次に、前半のお話、そして、今の質問へのお答えなども含めて、杉戸所長からコメントをお願いできるでしょうか。

杉戸 「伝え合いの意味」というのが今日のテーマの副題に掲げてあります。その副題をお三方のお話を聞きながら繰り返し読み直しておりました。思い出しながら、質問へのお答えも伺っておりました。日ごろ、研究所の仕事としては、言葉の研究とか、言葉の教育という物事について考える仕事をしています。調査をしたり、文献、資料を扱う仕事をしています。ともすればその仕事がついつい具体的な言葉の発音とか、単語の形とか、文法とか、細かい言葉の違いとか変化、そういった言葉そのものに目を奪われてしまいがちであることを、今日改めてまた感じて、反省のような気持ちをもって聞いておりました。そういう仕事自体は、それはそれで大切だと信じて、これからもそういう仕

事を続けたいと思いますけれども、そんなときに基本的な心、つまり、コミュニケーション、あるいは伝え合いの意味ということ、たとえば今日のような問題を感じながら考えることがいかに大切であるかということをも今日勉強いたしました。これはこれから申し上げることに関係すると思いますが、なにも言葉の研究を仕事とするものだけではなくて、一般の家庭の中での暮らし、いろいろなお仕事での、その仕事の場での暮らし、そういったところでもやはり言葉そのものと、言葉を交わす、伝え合う、その言葉そのものと伝え合うということ、これを区別して考えるということ、これもよく忘れがちなことではないかと思っております。そういう意味で、お三人の話は言葉の基本的な事柄のうちの中でも、さらに基本的なところを改めて考えるための手掛かりを、非常に具体的なそれぞれのお仕事の中から、具体的な例を出していただきながら、考えるための手掛かりをたくさん与えてくださったと思います。そういうお話の中で共通していたことがいくつかありました。その共通していたことのいくつかの中から一つだけ、私がここで申し上げたいと思うのは、伝え合い、コミュニケーションにまつわる曖昧さと率直さと言いましょか、ズバリ言うという意味、そういう意味で率直さという言葉を使いますが、曖昧な伝え方と率直な伝え方、その二つの事柄をどんなふうにとらえたらいいのか。それをお三方は別の言い方、別の事例をもって、それぞれの焦点として取り上げてくださったと思います。曖昧さとか、率直さのもつよい側面、それから、よくない側面、あるいは、曖昧さが逆に必要となる場合、あるいは不必要な場合、さらに逆に、話が裏表の関係ですから、ごちゃごちゃしますが、率直さが求められる場合、あるいは率直さは控えるべきである、控えたほうが良いという場合と、それぞれ裏表の関係にあるような二つの事柄を比べながら、対比しながらお話は組み立てられていたと私なりに聞いておりました。そして、ここが大切だと思っているのですが、単に比べながら考えるだけではなくて、その二つの側面をまとめていく道を探すべきだということです。そのことを強調された。その両面を暮らしの中で生かしていくことが大切だということ、それぞれに聞かせていただいた。そんなふうに聞きました。確かに日ごろ暮らしていると、相手の言い方、話の進め方について、なんだかはっきりしない言い方だなと相手の曖昧さを気にしたりします。逆に、えらくはっきり、ズバリ言ってくれるじゃないか、もうちょっとやさしく言ってくればいいのかと涙が出るようなときもあります（笑）。相手の率直さにたじたじとなったりするんです。そんなこともこれまた一方で少なくありません。両方あります。そんなときのことについて、思い出しながら私は話を伺って

いたわけですが、こんなことを思います。一つは、相手の話し方が曖昧だとか、はっきりしない、たくさんの言い方の中から、なぜこれを選んで、もうちょっとはっきり言える言い方があるだろうに。そんなことをいろいろ考えたとき、曖昧だと感じたときには、心構えとして、まず、イライラしない、じれないということです。これは本気で申し上げています。むやみにもっとはっきり言ったらいいんじゃないの、あるいは言ってほしいということをやったり、顔に出したりしないで、まずは自分の内で受け止める。もう一方で、逆に相手の話し方が率直すぎる、ズバリ言いすぎているんじゃないか、もっとやさしく言ってほしいのに。そんなふう感じた場合、カチンと来ているわけです。そのカチンと来る気持ちを、心構えとして、まずはぐっと抑える（笑）。逆にしかられているような、たしなめられているようなことになることが多いわけですから、怖がったり、縮み上がったたりしない。もっとやさしく、遠回しに言ってくれればいいとすぐには思わない。これまた両側面、両方向ありますから、二つあるんですが、いずれにしても、一方ではイライラしない、じれない。他方はカチンと来る気持ちを抑える。縮み上がらない。あくまで心構えの問題ですが、まず、その姿勢を整えることが必要だと私は思います。これは日ごろ私なりに努力していることを申し上げているだけではありません。いかに難しいかを感じつつ申し上げる。ひと言で言えば、その両方に共通してまとめて言えば、相手の曖昧さや率直さにたじろがないで、一歩立ち止まる。これが普段の言葉の暮らしで非常に大切なことではないかと感じます。立ち止まるだけでは改善はきっとされません。気持ちは落ち込んだり、腹が立ったりするだけでしょう。大切なのは次の段階。今までは第1段階だとして、第2段階として申し上げれば、相手の話し方の曖昧さとか、率直さについて、なぜだろう、なぜこの人はこういう話し方を選んでいるのだろう、どうしてこの相手はこういう率直な、ズバリという言い方を選んだんだろうということを一歩立ち止まって考える。先ほどのたじろがないというものの次に考えるという段階が必要だと思うのです。なぜそのように考えるかと言いますと、今日のお三方のお話、話し方の曖昧さとか、率直さについて、それぞれいろいろな背景とか理由があるということをお聞かせくださいました。小池さんは大阪の事例を取り上げて、日本の中の大きく東と西に分かれるようなことがよく議論されます。その中でも典型的だと言われる大阪の曖昧さ、あるいは率直さを取り上げ、いわば話し方の地域性ということに目を向けてくださいました。あるいはその地域の文化とか、かたぎ、気質といったものごとをお思い出させてくださいました。それを単にいいとか悪いとかではなくて、よりよい

曖昧さ、望ましい曖昧さを大切にしたい。そういうことを提言されました。清さんは世界の東と西の話から話を始められました。西洋思想と東洋思想という枠組みで、ものの見方の基本的な2種類をタイプの的にとらえるというところからお話が始まりました。そして、その二つをそれぞれに大切にしながら、改めてまとめる方向を示してくださったと思います。単に対立の中でとらえるのではなくてというお話でした。箕口さんは具体的に学校の場面、学校という社会の中でのお話でした。そして、そこの中にある様々な立場の人々、子供、保護者、あるいは先生方、そして、学校のカウンセラーの方という、学校と社会の中でのいろいろな立場の人同士の間での協働性、コラボレーションという外来語でおっしゃいましたが、一緒に問題を解決しようとする、そのことの大切さをおっしゃいました。そして、その中で、これはお話の後半に集中していたと私は思うのですが、話し方の選択の必要性、あるいは立場や役割に応じた話し方の大切さ、このことにお話が及びました。つまり、その中にも曖昧さとか、率直さというのが含まれているに違いないと思って聞いたわけですが、今日のお話の焦点の一つとして私が選んだ、曖昧さとか率直さという話し方の持つ光と陰というのでしょうか、そういう二つの側面それぞれに申し上げたいのは、それぞれにいろいろな背景や理由がある。由来がある。文化的な、あるいは歴史的な事情がある。そういうことに思いをいたす瞬間をつくって、すぐにたじろがないで、あるいはすぐに怖がらないで、一歩立ち止まって考える時間を、ごく普通の言葉の暮らしの中に取り戻したい。そんなふうに思ったわけです。そのことを考える。その時間を取るということです。これがおそらく出発点になる。毎日の具体的な言葉の暮らしで、曖昧さにイライラしたり、率直さにカチンとしたりすることを、なんとかして避ける。この率直性、曖昧さのよってきたるところは何だろう、なぜなんだろうと思いをいたす。箕口さんのスライドの最後のほうで出てきました「少々のヘッドワーク」というのがありました。「フットワーク、ネットワーク、三つ目、そして、少々の」と書いてあったところがしみじみと拝見できたんですが、普段のコミュニケーションの場面で、決してカウンセリングの場だけではないと私は思って伺ったのは、少々のヘッドワーク。「なぜだろう、この曖昧さは」と問う。その姿勢です。そういうメッセージを込めたお話をお三方から伺ったと聞いた次第です。とりあえず最初に司会者が御紹介した、曖昧さと率直さ、その兼ね合いはどうか、どう具体的に兼ね合いをつけるのかということについてのお答えにつながる第1段階と第2段階を申し上げたつもりでおります。第3段階以降がこの先展開できればと思うんですが、私自身もドキドキしていま

す。

司会（熊谷）ありがとうございました。イライラしない、カチンとしない、縮み上がらないということで、コミュニケーションというのは重要なんだなということをしみじみ思っています。曖昧さと率直さ、どちらかが勝ってしまうこともあるかもしれませんが、先ほどの御質問でたくさん出ていました、両方を兼ね合わせた言い方ということでお話を伺いたいと思います。言いたいことは言うだけけれども、相手のふところに飛び込むような、あるいはうまく、するっとそれを相手に届けてしまうような言い方というのはどうしたことなのか。また、箕口先生のお話にも、実際に作業をするときというのは、なかなかお愛想だけでは済んでいられないということがありました。信頼関係をつくりあげるといふことと、実際の作業とか問題解決をしていく上で、それは両立するのがときには難しいこともある。そのようなときにどういったことがポイントになるのか、それから、その中で、言葉を使うということが、どんな役割を担うのかといったようなことについて、どなたからでも結構ですので、コメントをいただければと思います。

小池 ちょっと私が自分の持ち時間の中で申し上げられなかったこともありますので、今の問題提起に関連して、本当はお話ししたかった要素も含めて言うと、曖昧さと率直さの兼ね合いというところに、私は合理性というものが介在していると思うんです。これまた大阪、あるいは周辺の言葉の中から見つけたことですが、たとえば阪神電車に乗ります。阪神電車に乗って、ドアのところにもたれかかっていると、シールがはつてあるんです。見ると「指詰め注意」と書いてあるんです。ああいう表現は東京のほうではしませんね。説明ですね。戸袋に手を引き込まれないようにということですから、そのてのことが書いてありますが、向こうは「指詰め注意」と書いてある。これを東京から観光客が行くと、向こうはやっぱり下品だねとなるんですが、向こうは直^{きつ}截にものを言うわけです。くどくど理由をそこで述べないで、とにかくここでは伝わるのが最優先だという判断をした場合は、きわめて合理性を發揮して「指詰め注意」。今日、写真を持ってくるのを忘れて申し訳ないんですが、皇子山動物園（滋賀県）というところに行きまして写真を撮ってきました。サルのおりのところに看板が立っていて、「注意 噛^かみます」と書いてあるんです（笑）。上野動物園なんかに行くと「ただ今発情期ですので」どうのこうので「近寄らないでください」と小さい字で書いてあるんです。字が小さいから、そばへ寄ったらかえって危ないんですけれども、向こうは「噛みます！」と大きい字で、びっくりマークかなにかをして。それはやはり合理性なんですけれども、くど

くど言っていたらかえって危ないし、回りくどいことはここは要らない。そういう表現をする大阪の人たちは同時に、今日申し上げたように、たくさんフアジーな表現を持っていて、ここぞというときは反転して合理になるわけです。この曖昧と直截な、率直なものをつなぐのは、私は合理性だろうと思います。論理性とは違う。合理的な判断がそのあいだに介在しているのではないかなと思いますが、いかかでしょうか。

清 今小池先生がおっしゃったことは、どちらの例も攻撃性を持たないということに共通点があるように思います。それから、事実を伝えているということでも共通していませんか。「噛みます」という場合は、サルが噛むよという事実を伝えているわけで、教条的に、だから、手を触れるとか、近寄るとか言っているわけではないですね。「指詰め注意」というのも、直截的には見えますが、言語表現そのものはそう見えますが、何か凶器を持っている人が「指詰め注意」と言っているわけではないんですよ。自動的に閉まるドアについて、あなたが自分で気をつけてくださいねということで、指を詰めないでくださいねという配慮ですよ。ですから、相手の攻撃性はそこになにもないと思います。ですから、私がちょうどした質問も、不満を伝えるのはどうしたらいいか、何か考え方が基本的にあるかとか、何か参考書がないかとか、そんなに言ってしまったら、かえってもっとけんかがひどくなるんじゃないかとか、そういうものをたくさんいただいたんですが、一つ、目指す方向としては、攻撃性ということは避けるということだと思います。建設的に言うということだと思います。言うときに相手に、相手のほうも同じトレーニングを受けていれば問題ないんですが、こちらだけでコミュニケーションのトレーニングを受けて、相手は全くそういう予備知識なく聞くので、向こうのほうに傷ついたり、言われたということだけで受け止めることができなかつたりすることが往々にしてあると思うんです。ですから、そのときに一応今から申し上げにくいことを言うんだけど、なぜ言うかという、私たちの関係をよくしたいからであるとか、あるいは、これを言うことによって、また今後同じようなことがないように、次のときにいいようにと思って、ぜひ聞いてくださいねという言い方で言ったら、相手は少しは耳を傾けてくれるんじゃないかと思います。夫婦げんかのときもそうだと思うんです。「あなたのことを愛してるのよ。だから、あなたとの関係をうまくやっていきたいから。だから、この関係をうまく継続したいから。だから、聞いて」と言えば、聞いてくれるんじゃないかと思うんです。いかがでしょうか（笑）。

箕口 カウンセリングの訓練の一つにアサーショントレーニングというのがあるんです。

アサーションというのは要するに主張です。自己主張というか、自分の言いたいことを相手を傷つけずにいかに伝えるかという訓練ですけれども、その場合に、訓練なのでロールプレイをやったりするんですけれども、それぞれの役割があって、実際にやりとりをする。その中で割とよく使われるのは、アイメッセージとユーメッセージという違いです。カウンセリングに限らず、いろいろなコミュニケーションの領域ではよく言われていることですが、アイメッセージというのは、普段のコミュニケーションの中では我々は忘れてしまうコミュニケーションの仕方です。ユーメッセージをほとんど日常的には我々は使ってしまう。ユーメッセージというのはどういうことかと言うと、「あなたはこうしてほしい」とか、「あなたはこうでしょう」とか、そういうニュアンスの伝え方です。それに対してアイメッセージというのは、「あなたがこのようであると私は思う」という前提があるわけです。あくまで「私はこう思う」という伝え方です。実際にロールプレイなどで聞き役をやってみると、アイメッセージで伝えられた場合とユーメッセージで伝えられた場合は非常に受けるニュアンスが違うんです。アイメッセージで伝えられたほうが相手の言うことをこちらもよく理解できる。カウンセリングだけではなくて、実際に親子のかかわり方、コミュニケーションのとり方もそうだと思いますけれど、我々はいつ子供に対して親という上の立場でものを言うてしまうことがあるんですが、基本的には親子であっても対等な立場であるというか、そういう立場で、しかもアイメッセージで伝えるということが、そのコミュニケーションがうまく進んでいく一つの方法ではないでしょうか。なかなか難しいことだと思います。

清 申し訳ありません、レディーファーストで。今のアイメッセージ、ユーメッセージの実例を少し挙げさせていただきます。私もコミュニケーショントレーニングで学生にやっているんですが、たとえば、デートをする相手がいつも遅れる。「全くもう、いつも遅れるんだから」と言いたい。これはユーメッセージで、「あなたが悪い」というユーメッセージです。それをアイメッセージに変えるというのはどうしたらいいかと言うと、たとえば、「私はあなたのことが大好きだから、1分でも早くあなたに会いたいの。それなのにあなたが来てくれないから、私はとても寂しく思うの。早く来てくれるとうれしいな」。これがアイメッセージです。

小池 そのことと、杉戸社長ではなくて杉戸所長がおっしゃった（笑）、一歩立ち止まって考えるということの関係をちょっと考えてみたいと思うんですが、アイメッセージ、ユーメッセージとも関係します。一歩立ち止まって、イライラせずに考えるということは、

本当に冗談ではなくて大事なことなんです。なぜ大事かというと、考えるというのはただ頭を働かすということではなくて、もっと分かりやすくと言うと、自分の問題として考えるということなんです。今日の御質問の中に、「コミュニケーションが上手な人とは」という御質問が一つあります。たとえば、有名人の誰々とか、職業とか、誰がたけているのか、誰を手本にするとよいのか。誰が手本かということを考えても、それはその人の歴史、風土の中で意味があるわけですから、手本を追い求めても、コミュニケーションを自分のものにしていくということにはさほど役に立たないと思います。最初のコミュニケーションが上手な人とはというのは、自分の問題として考える力が高い人だろうと私は思います。今のユーメッセージで「おまえはこうだから」というのは比較的簡単なんです。そうではなくて、自分の問題としてそれを考える。近々、私が去年の4月から仕事を始めた大学で卒業演奏会があります。音楽系の大学ですので、卒業演奏会があり、あいだに卒論の優秀なものをいくつか発表するというのがありまして、そのうちの1人が私が面倒をみた卒論だったものですから、それを発表してもらわねえです。ビデオを使ったり、パワーポイントを使いながら、その学生が最後のパフォーマンスをやるんです。自慢話ではなくて、私はこの手のことをやる時は必ず自分で構成を考えます。押しつけはしませんが、彼は彼で計画を立ててもらいながら、私は私でそのためのビデオ素材なども、今自分の手元にありますので、それを見ながら、自分で構成を立てるんです。そうしないとその学生の思いというのはつかめなはずです。それから、欠けているところが本当に見えてこない。自分の問題として立ち止まって考えるというのは、実はそういう訳なんです。今日の私の基本モードは、ジャパン・オリジナリティの話をしたくて、ずっとここに座っているわけですが、日本の私たちの独特なコミュニケーションの中にはそういうものがあつたんですよ。いつでも自分の問題として考える。日本の伝統芸能も教えていますが、能や狂言や歌舞伎や文楽にしても、みんなお客は自分の問題として考えているんです。だから、なよなよとした歩き方でまちを歩いてみたり、長唄を勉強してみたり、歌舞伎役者のものまねをするんだけど、そこへ必ず自分の知恵を入れていく。こうやって今日の一つのキーワードである「協働」、ともに働く協働関係が、共犯関係が成り立つわけです。舞台の上と客席。その客席のお客さん方は、単に楽しんでいるだけではなくて、実はその楽しみをもっと楽しむために、そういう教養を身につけながら、あるいは歴史や俳優や歌手の経歴、技能というものを勉強しながら、舞台を楽しみ、舞台のほうは舞台のほうで、見功者^{みこうしや}に対して、聞き功者^{きこくしや}に対して応えて

いくために、より高いものを。両方が自分の問題なんですよ。これが江戸時代までに、完成はしませんけれども、非常に高いところまで持ってこられた日本のコミュニケーション文化だったんです。これを今の社会に復活しているのがなんとトヨタなんです。トヨタは、係長だろうが、課長だろうが、部長だろうが、部下が何かの企画を持ってきたら、それを客観的に、論理的にとらえるという仕方はバツです。自分の問題として考える。自分がそれをやるとしたら、どういうことなんだろうかということを考える能力がある人間が部長や課長を張る。張っている以上はそれをやるのが仕事だというのがトヨタのやり方なんです。徹頭徹尾自分の問題として考えさせる。自分の問題として考えると知恵が出てきますから、その知恵が次の、トヨタの場合は技術開発に結びついてきているわけです。トヨタは世界中の人たちが見に来ますけれど、最近注目されているのが、聞くところによると、「すり合わせ」という会議だそうです。これは外注の技術者も出ます。ヒラ社員も出ます。係長も出る。課長も出る。部長も出る。役員も出ます。五つぐらいあるテーマに関係する人たちが 200 人ぐらい出て、そこで議論するんです。当然発言しない人もいますが、発言しないまでも、頭の中で自分の仕事とすり合わせる。つまり、自分の問題としてそこで議論されていることを吸収していくから、いろいろなことが知恵として次に出てくる。こういうことをコミュニケーションでトヨタはやっているんです。そういうふうにしていかないと、これからの技術開発は世界の中で輝いていけないからです。もう今や工業の時代は過ぎて、インダストリアル^イの時代ではなくて、サイエンスの時代になり、サイエンスの時代も終わって、芸術、アートの段階に入っています。レクサスなんていうのはタイヤの車輪は真円です。真円というのは、全くゆがみがない円です。だから、タイヤから来る振動はないわけです。そんなものがなぜつくれるかという、すり合わせの議論の中でいろいろな知恵が出てくる。みんなが自分の問題として考える。トヨタがトヨタを自分の会社として考える。組合も経営のことを考える。経営者は部下のことを考える。これは日本が昔からやってきたコミュニケーションを組織として大々的に、緻密^ちに実行、実践している姿なんです。これが今日申し上げた、曖昧な文化がいいですよ、いいですね、じゃあ、今までとおりでいいんだなというふうに思われては困るといったところなんです。曖昧な文化というのは非常にポテンシャルが高い。いろいろなものを生み出す、生産性の高い文化だと私は思いますが、大事な条件がある。それが自分の問題として考えるということです。徹頭徹尾自分の問題。芸能の世界でも昔の人たちがやってきたように、自分の問題として考えることによ

って見えてくるもの、それを出し合う。こういう文化なんです。これが今のトヨタの繁栄にも結びついていますし、おそらくこれから日本のそういう曖昧な文化が世界から注目されて、その先鞭^{べん}を今アニメやゲームがつけてくれているんじゃないかなというのが私の見方でございます。ですから、杉戸所長がおっしゃった、一歩立ち止まるとか、考えとかいうのは、私は自分の問題として立ち止まって考えるというふうに読みたいなと思います。その先に箕口先生がおっしゃった協働性というのが自然に生まれてくるのだろう。日本の社会というのはそういうことをやってきたということをもう1回再認識をして、そこからどうこれから一人ひとりが、あるいは会社や学校が組み立てはじめるか、失った自信をどう取り戻すかということが非常に大事な段階に今来ているんじゃないかなと思います。ちょっと長口舌で大変失礼しました。

司会（熊谷） ありがとうございます。いろいろ具体的なお話が出てきて、いちばんおもしろくなったときに不調法な司会が出るようで、大変恐縮なんですけれども、そろそろ予定の時間となってまいりましたので、最後に、また率直な言い方であれなんです、杉戸所長から1、2分でとりまとめを（笑）。

杉戸 1、2分というと……。一言で申しますと、私が今の議論を伺いながら思っていたのは、こういうホールによく天井からぶら下がっているミラーボールです。光を当てるとキラキラ輝きます。あれはなぜ輝くかという、いろいろな角度からのいろいろな光を反射しているからで、決して一つの光だけを反射しているんじゃない。鏡はたくさんついている。鏡を1枚置いただけだと、1色の反射しかない。ミラーボールというのは、鏡の部分の数をたくさん増やせば増やすほど、細かい光できれいになります。つまり、相手の話をどう受け止めるか。それをできるだけたくさんの鏡を自分の中で用意したい。そんなふうに思いました。それによって立ち止まる余裕も出る。なぜだろうと考える、その考える道筋もたくさん広がる。そんなふうに考えます。アイメッセージなのか、ユーメッセージなのか。その選択も広がるだろうと思います。つまり、選択肢を広げるためにミラーボールをイメージしたい。こんなふうに思いました。ミラーボールは鏡の角度をつけてできていますから、デコボコしています。そして、細かければ細かいほどいいということになると、究極は球です。円というか、本当のまん丸なものです。円満な人格というのはそういうものだろうと思います。つまり、ちょっと乱暴なまとめ方なんです、曖昧さ、率直さ、多様性、アイメッセージ、ユーメッセージというお話も出ました。そういったことをどう兼ね合いをつけるかというのは一本化はできない

だろう。多様性の中からいろいろな反応の仕方、あるいはしゃべる側に立てば、いろいろなしゃべり方から選ぶよりほかない。そのときに光を発するというイメージも含めて、ミラーボールの多面性というのを大切にする。こんなことが今日の私なりに伺ったお三方のお話の一つの筋であったと思います。いかがでしょうか。2分半かかりました(笑)。

熊谷 ありがとうございました。本日は言葉で伝え合ったり、共に何かをしていくということについて、いろいろな角度から考えてまいりました。皆様、何かきっかけをつかんでいただいたり、ヒントを見つけていただいたりしていただければ幸いです。先生方もどうもありがとうございました。会場の皆様、ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。これで予定しておりましたプログラムはすべて終了いたしました。冒頭で所長が申し上げましたおみやげはお持ちになれましたでしょうか。それでは、これで国立国語研究所第29回「ことば」フォーラムを閉会いたします。それから、アンケートをよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

<終了>